

越後 新川開削ものがたり

～ 川の下を流れる川がある ～



内野砂山掘削之圖

十返舎一九『滑稽雑加羅寿』より
新潟県立文書館蔵を模写 (細貝 美貴雄)

第一章	新川開削前	1
第二章	金蔵坂の堀割と底樋工事	7
第三章	新川改修と上知令、三潟の開発	13
第四章	明治以降の新川の変遷	19
第五章	新川開削 200 年祭にむけて	27

第一章 新川開削前

◆ はじめに

「越後・新川」それは、地元の人が川を意識しないほど何の変哲もない、どこにでもある普通の川である。

『全国有数の米生産高を誇る西蒲原郡の美田が、現在の姿になったのはそれほど古いことではない。西蒲原のほとんどの悪水を集めて日本海に放流している新川、その新川が江戸時代の末に堀割されたお蔭だ。』

西蒲原の地名は文字どおり、新しく出来た潟の西方にある蒲や葦の生え茂る原であった。当時の西蒲原の低湿地帯に住む農民にとって、雨が降る度に襲って来る湛水被害と、その後の悪疫から逃れるために排水路を作ることが、生きるために必要そのものであった。

堀割の許可を得て、工事が成功するまでの先人の苦労とその後には待っていた幕府の上知令の仕打ち、以後幾多の改修と底樋の増設、明治から大正時代へかけて新川暗闇の建設、そして昭和30年現在の水路橋への歴史は、現代の私たちに多くのことを語りかけている。

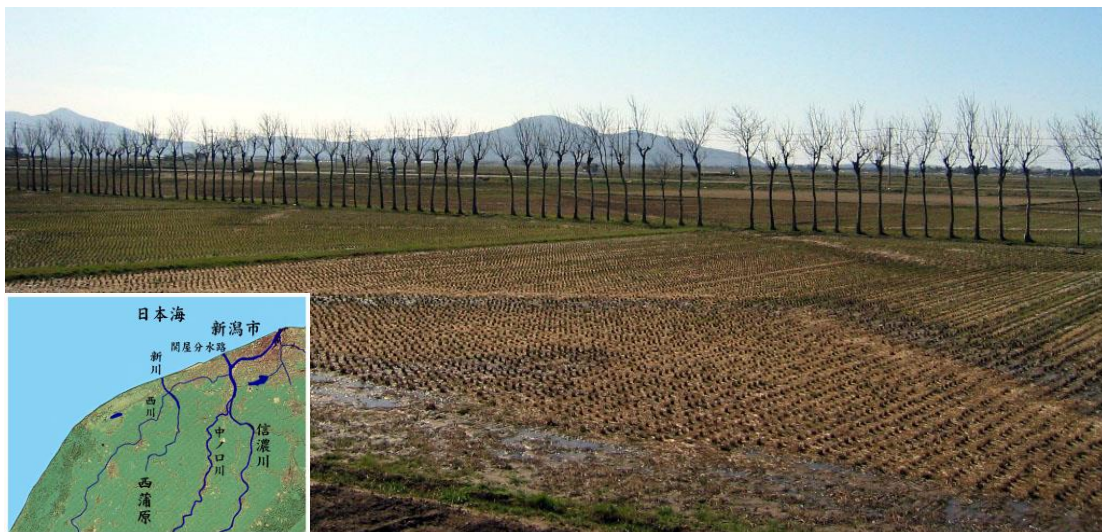
◎ 川が立体交差する西川水路橋

西川水路橋は、新潟市の中心部より西南西に10km、西区内野の槇尾にある。江戸時代末に掘削された川幅75mの二級河川・新川がゆったりと流れている。その新川の上の赤く塗られた狭い鉄橋の中に一級河川の西川が流れ、西川と新川、二本の川が立体交差している。

全国に数十箇所の川の立体交差はあるが、ここはその全景をそのまま見ることができる稀有な場所だ。10m上流には交通量の多い西大通り（旧国道116号線）が走っている。しかし運転者も、その赤い鉄橋の中に川が流れているとは、近寄ってみるまで気が付かない。近くの内野住民でも『なぜ川が交差しているのか』の由来を知っている人は少なかった。



新川の上の狭い鉄橋内を流れる西川 撮影：加藤

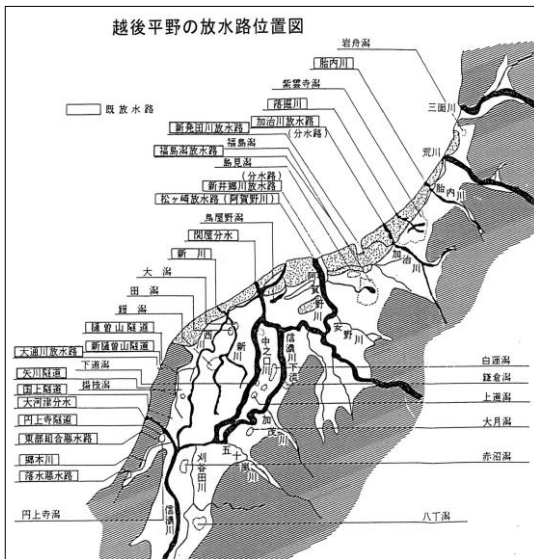


◎ 西蒲原と越後平野の放水路

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置し、信濃川・阿賀野川などによって運ばれた土砂が堆積して形成された日本最大の沖積平野である。土地は平坦で、標高は低い。市の西部には、弥彦・角田山塊が、南部に新津丘陵があり、越後平野を挟むように連なっている。海岸線には、長さ70kmに及ぶ日本有数の大砂丘がある。この砂丘は、信濃川・阿賀野川の二大河川やその他の河川が吐き出した越後山脈からの大量の土砂と、日本海の荒波によって作り出されたものだ。

今日の越後平野には、大河津分水を始め20の放水路が内陸部の排水を海に流している。しかし、正保2(1645)年の越後国絵図には北に荒川と、信濃川の河口が画かれているのみであった。近世中期以降、新田開発のため、潟湖の悪水を海へ排水する放水路が開削され、新川は人工によって掘られた川である。

北からの胎内川、落堀川、加治川、新発田川放水路、福島潟放水路、新井郷川、そして松ヶ崎放水路(阿賀野川)、関屋分水、新川、3本の樋曾山隧道、大通川放水路、矢川隧道、大河津分水路などは、すべて人の力と汗によって掘られた人工の放水路である。



越後平野の放水路位置図 出典：アーバンクボタ17号 P51 大熊 孝原図に追加

◎ 大低湿地帯だった西蒲原郡三潟地方

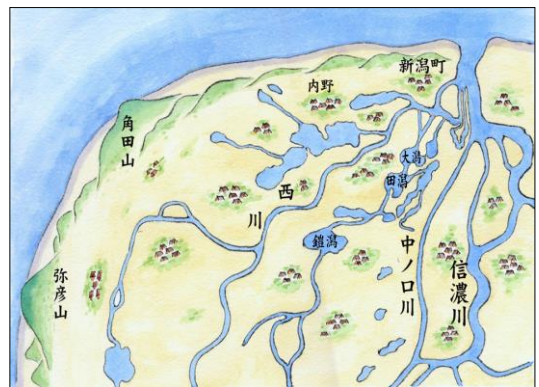
西蒲原郡の西南は信濃川、東南は中ノロ川の堤防、西部は弥彦山山塊、北部は海岸砂丘に囲まれた不完全輪中地域である。東西約14km、南北約32kmに亘る長方形であるが、東部は割合に狭く、西南部に向かって拡大している。

西川はかつて西信濃川と呼ばれ、西蒲原の海側を流れる大河川であったと云われる。西川沿いの新潟市西部や旧西蒲原郡西川町・巻町には、江戸時代、大小の潟湖が点在する広大な低湿地帯が広がっていた。西川と中ノロ川の間にある最大の潟は鎧潟で、その下流には田潟・大潟があった。この三つの潟と周辺の地域は、まとめて三潟といわれた。これらの潟は遊水池と同時に、用水溜の役割を果たしていた。

西蒲原郡内は、鎧潟上流部を上郷、鎧潟下流部を下郷と呼んでいた。上流部の上郷は、標高10mから緩やかに鎧潟に向かって傾斜していたが、水源に乏しく、湧水に悩まされていた。

一方の鎧潟よりの下流の勾配は、8km歩いてようやく1m下がるという平坦さであり、標高もほとんど1m以下の湿地帯であった。

これらの地域の大部分は長岡領であったが、幕府直轄領をはじめ、村上領・新発田領など9藩もの領地で分割・管理され、治水対策も各藩独自で対応していたため、全地域を一丸とした根本的解決策は講じられていなかった。



新川開削前の西蒲原地方 絵：細貝 美貴雄

◎ 三瀧の悪水「三年一作のこもる水」

鎧瀧には、大通川・飛落川・今井通川などが流れ込んでいたが、排水路は早通川だけであった。この後、水は田瀧に入り、田瀧で二つの流れで大瀧に入っていた。

西川は長年の土砂の堆積で川床が高い通称「天井川」となっていたため、早通川から西川への水はけが悪く、大雨の際は逆流を避けるために自ら水門を閉じた。

標高 1m以下が 5000ha. に及ぶ鎧瀧下流の勾配は、鎧瀧～田瀧の間 6000 分の 1、田瀧下流～海面迄 10000 分の 1 の緩やかさであり、窪みの場所は平均潮位以下のところもある低地である。

その為上流部で雨が降ると三瀧の水は行き場を失い、田んぼ一面水浸しとなり、農民はただそれを呆然と眺めるだけであった。その上、西川の水位が下がらなければ水門を開けることは出来ず、雨が上がってもなかなか田んぼの水は引かず、この地域の水は「こもる水」と呼ばれ、長期間にわたる湛水被害により、収穫の喜びをみることは稀であった。反面、夏の渇水期には西川の枯渇による干害も受け、三瀧地方は洪水と渇水という二つの水害に悩まされる常襲地帯であり、江戸時代から戦後までの 350 年間に、100 回（ほぼ 3 年に 1 回の割合）の洪水に見舞われていた。



水害に悩む西蒲原の農民 絵：細貝 美貴雄

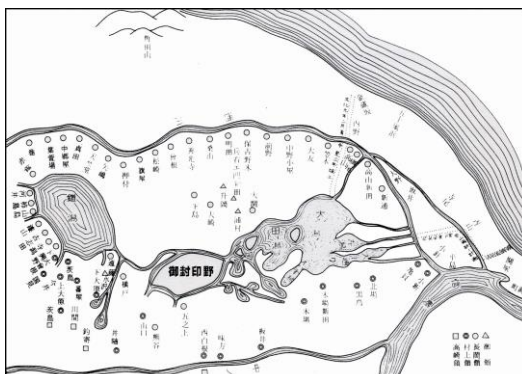
◎ 御封印野新田開発を願い出る

三瀧地方の鎧瀧から田瀧へ通じる早通川右岸側の一角は、「御封印野(ごふういんの)」と呼ばれ、幕府が三瀧地方を洪水が襲った際の遊水池として、右岸一帯の開発を禁じていた。

享保 7 (1722) 年、幕府は積極的な新田開発政策を打ち出した。これは、貞享 4 (1687) 年に出されていた町人請負による新田開発の制限を緩め、幕領や藩領が入り組んだ土地であっても、新田開発をするよう奨励したものであった。これにより、信州出身の竹前小八郎が、紫雲寺瀧とその周辺の新田開発を許可されたのは享保 12 (1727) 年である。また、地元優先の方針を改め、他領の者でも先願者を優先した。

御封印野続きの原野の開発は、元禄 3 (1690) 年に行われたが湛水のためすぐに荒地になった。

延享元 (1744) 年、瀧組は鳥原から信濃川への排水路を掘削し、御封印野を開発することを幕府に願い出た。同 3 年幕府はこれを許可し、関係村々は堀割の掘削について取り決めを行った。翌 4 年に、瀧組 37 か村のうち 12 か村によって掘削工事が始められた。工事は寛延 2 (1749) 年に完成し、宝暦元 (1751) 年に検地を受けたが、勾配のない排水路はむしろ逆流による水害を発生し、10 年で廃止された。



西蒲原郡三瀧付近 出典：『信濃川百年史』

◎ 北前船で繁栄した新潟港

阿賀野川は江戸時代初期の寛永の大洪水により、信濃川に注ぎ込むようになり、両大河の河口は一つになった。それまで信濃川河口部に堆積していた土砂が、流送土砂の少ない阿賀野川の合流によって押し流された。この結果信濃川河口は水深が深くなり、新潟は日本海屈指の良港となった。

この頃河村瑞賢の西回り航路が開発され、幕藩体制の根幹の蔵米輸送が確立された。

元禄から宝永年間頃(1688～1711)、信濃川中央部の水深は23尺(7m)、両岸でも15～20尺(4.5～6m)と深く千石船が楽々と出入りができ、北国帰りの船はほとんど新潟港に寄り、蔵米、海産物、木綿、塩などの集積地としての問屋と倉庫が軒を並べていたという。

元禄10(1697)年の記録には、入船40か国から3,500艘、港への輸入品の総額は46万両、新潟港からの輸出品の総額は57万両に達した。取り扱いの中心は米で、元禄10年に新潟に運ばれた米は約70万俵と記録されている。



江戸時代の北前船



江戸時代の航路図 出典：新潟県の歴史散歩

◎ 新潟港、松ヶ崎堀割で打撃

松ヶ崎堀割は、当時越後で最大級の潟であった紫雲寺潟(塩津潟)の干拓に関連して開削された排水路工事である。

紫雲寺潟に流れ込む加治川の支流境川を締切り、水量の増える加治川の排水を図るため、加治川が流れ込む阿賀野川に、堀割を掘ることにしたのである。工事は幕府の監督下で、新発田藩が実施した。

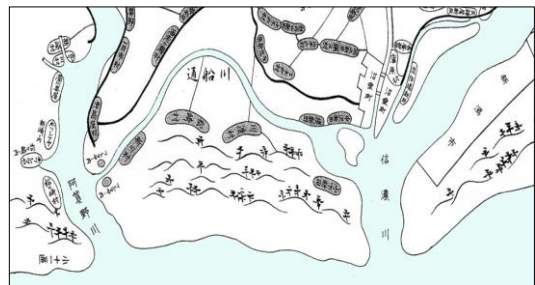
この工事には、新潟港の水位の低下を心配する新潟町の猛反対があった。阿賀野川が直接日本海に流れ込むようになれば、信濃川の河口の水深が浅くなり、新潟町の死活問題である。

そのため、①堰を設け阿賀野川の増水分だけを流す堀とすること、②堀割が破壊されたらすぐに復旧すること、③港として使用しないことなどを条件で、享保15(1730)年8月23日着工、10月14日完成した。

しかし、翌年の春の雪解け水などで、堀割はあっけなく決壊して阿賀野川の本流となり、新潟町の心配が現実となった。信濃川の河口も土砂を排出できず浅くなり、北前船の入港が困難となった。

この結果、阿賀野川の水位は4尺(約1.2m)も下がり島見前潟は陸地と化し、福島潟周辺にも広大な干上り地ができた。しかし、阿賀野川縁には用水不足に悩まされる村々も出た。

以後、阿賀野川右岸の開発は急速に進展することとなり、それに刺激されて地元庄屋の間に、新田開発の機運が高まった。



亀田郷地図 出典：「阿賀野川」

◎ 再度御封印野開発を請願

享保 17 (1732) 年、高田領柏崎町 (柏崎市) の豪商宮川四郎兵衛と高崎領又新村 (燕市) の庄屋新左衛門が、御封印野の新田開発を幕府に願い出た。

宮川らの開発計画は、御封印野の水を早通川を通じて西川へ排出せず、大潟から堀割を掘削し、新通水門の脇で西川をくぐる底樋 (伏越) を通し、さらに堀割を関屋村近くまで伸ばし、そこから海へ放流し、干上がり地を開発する案であったが、幕府の許可は出なかった。しかしこの計画は、初めて西川に底樋を通し、堀割と西川の立体交差を目指したことで、後に大きな影響を与えた。

◎ 三潟周辺の排水計画を請願

寛保 2 (1742) 年潟組は、新潟町が松ヶ崎堀割対策として実施した小阿賀野川の通水改良工事により、信濃川下流の水量が増えたため、西川の水はけが悪くなり、三潟周辺の湛水がひどくなったとして、新たな排水計画を願い出た。

この計画は榎尾下で西川に底樋を伏せ、内野の金蔵坂 (高さ平均 10~20m) を掘り割り、五十嵐浜から海へ放流するものであった。

◎ 長岡藩は新田開発を認めず

御封印野新田開発後も新田開発願人は引き続き現れたが、長岡藩は三潟の開発権を潟組に保持させるため、三潟水面を長岡領とすることを幕府に願い出た。この結果、安永 8 (1779) 年に長岡領五か村が上知され、代わって三潟水面が長岡領となった。

翌安永 9 年に、長岡領吉水新田 (栃尾市) の庄屋彦六が三潟の新田開発を長岡藩に願い出たが藩はこれを認めなかった。

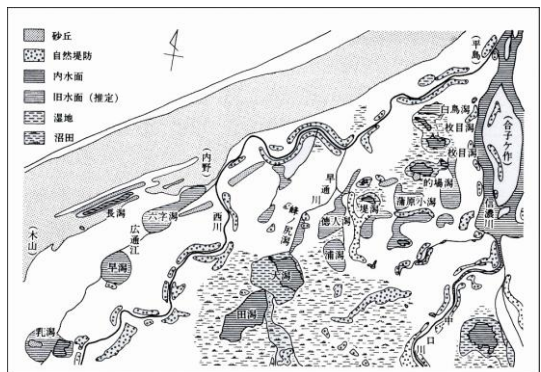
◎ 新潟町の反対と三潟上知の危惧

天明年間 (1781~89) には、この地域はたびたび水害に襲われ、農民の疲弊は著しかった。このため、湛水予防という治水策の一環として、堀割掘削運動が行われるようになった。天明 7 (1787) 年には、幕府領、村上領、新発田領の 33 か村が長岡藩に堀割の掘削を願い出ている。しかし、幕府は「長岡藩が反対している」として堀割開削を許可しなかった。

長岡藩が堀割開削に同意しなかった背景には、二つの大きな理由があった。その一つは新潟町の反対である。長岡藩は、新潟港を極めて重要視していた。新潟港から上がる仲金 (すあいきん) は藩の重要な財源であったし、御用金の負担も領内では最も多く、藩としては新潟港の繁栄を守る必要があった。その新潟町は松ヶ崎堀割の決壊以来、新たな海への排水路掘削は、港の衰退につながるとして強く反対していた。

藩は、新潟町がよいという案でない限り、掘削の許可はできなかった。もう一つは、開発後に三潟が上知されるおそれである。

享保の改革以後の幕府の新田開発政策では、堀割掘削によって生まれる新田地は、上知される可能性が高かった。また新規開発を口実に、掘削以前に開発された新田や既存の村までも上知されるおそれもあった。



西蒲原郡付近の潟 出典：新潟市史 通史編 2 近世



『文禄時代の西蒲原郡絵図』 出典：新川沿革史（西蒲原土地改良区新川工区）

◎ 悪水抜き堀割が実現寸前に

寛政 8 (1796) 年、幕領尼瀬町の米問屋京屋七左衛門と幕領村松浜の平野安之丞が、三潟の新田開発を幕府に願ひ出た。出願の中心は白河領柏崎町の豪商宮川四郎兵衛で、外に数十人が出願人であった。

幕府はこの願ひを許可することにし、同年 5 月、長岡藩江戸留守居役を勘定所に呼び出し、検分使として勘定組頭の勝与八郎を現地に派遣することを申し渡した。勘定組頭は、勘定奉行配下で勘定方の重職の一つであり、この検分に対する幕府の意気込みが感じられる。

勝は、堀割と直接関係する村のほか、新潟町とも折衝した。勝は、三潟周辺の悪水だけを排水すること、新堀割には西川の水を流さず、西川の通船も妨げないことで、新潟町との交渉にも成功した。

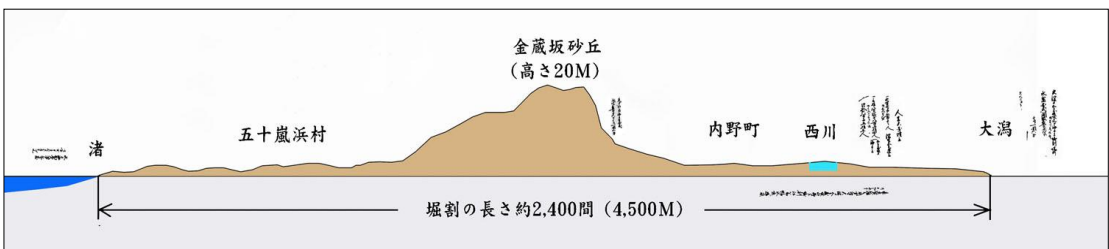
これによって天明 7 (1787) 年以来、幕領や村上領の村々が運動してきた悪水抜き堀割の掘削が、ようやく実現寸前までこぎつけたが、この堀割開削もいつのまにか立ち消えとなった。

◎ 堀割掘削運動も停滞

文化元 (1804) 年、長岡領内から二つの悪水抜き堀割の掘削請願が行われた。一つは新潟町の寺山両助から出された願書で、青山下を掘り割るといふ計画であった。新潟町の町人である両助が、青山下堀割の掘削についての新潟町の反対を知らないはずはないが、新田の開発が進めば新潟町へ出る穀物も増加し、結局は新潟町が潤うという論旨で請願している。

もう一つは蒲原両組の割元たちによる請願で、金蔵坂を掘り割る方法である。同 2 年、青山下堀割を主張する東汰上村武兵衛は、金蔵坂の堀割に反対し、曾根で農民たちに強訴をさせた。

武兵衛は打首となり曾根組割元此右衛門、五之上村庄屋は、不始末を問われて領分払いになった。その一方で自村の農民を参加させなかった庄屋や組頭は褒賞され、その上取り鎮めに当たった升潟村庄屋作右衛門の子吉郎兵衛は割元に取り立てられた。寺山両助も取り調べを受けている。これで堀割掘削運動も停滞した。



堀割願場所図 出典：新川沿革史

第二章 金蔵坂の掘削と底樋工事

◆ 伊藤五郎左衛門ら開削願いを再提出

文化3(1806)年6月、中野小屋村の伊藤五郎左衛門は、養父の跡を継いで中野小屋御蔵組割元に任じられた。同9年5月、伊藤五郎左衛門・曾根御蔵組割元中野清左衛門・坂井御蔵組割元前田平内(為七)の3人は、連名で金蔵坂堀割の掘削願いを長岡藩に提出した。

長岡藩は、割元3人だけの願書を取り上げず、さらに多くの関係村々に参加させるよう指示した。割元3人は曾根組の庄屋たちに働き掛け、願人は17人となった。(後に曾根組から願人1人が加わり18名)

文化10(1813)年5月、曾根組の割元・庄屋17人は、藩に金蔵坂堀割の掘削願いを再提出した。金主は岩室村の高島翁右衛門であった。藩はこの願書を受領し、関係する村々との調整を願人に命じた。



三潟水抜一件古文書

出典：『西蒲原郡土地改良史 写真編』

◎ 願人18名による堀割計画

藩の指示に従って曾根組願人は、先ず巻組と村上領の村々に堀割掘削への参加を呼び掛けた。その結果、潟組37ヶ村、村上領15ヶ村が参加することになる。文化11年(1814)年5月、長岡領18名の割元・庄屋が悪水抜き願人となることを申し合わせ、曾根代官所へ願書を提出した。

そして、同年の9月18日、曾根村割元・中野清左衛門宅にて第1回の合同会議を行い、ついで10月1日、板井村庄屋・萩野伝左衛門宅にて第二回合同会議を開き、工事の詳細検討、費用の分担、堀の幅・深さ・長さ、底樋の構造・長さ、橋の架設と数、用地の補償、漁業・製塩者への補償等を決めた。

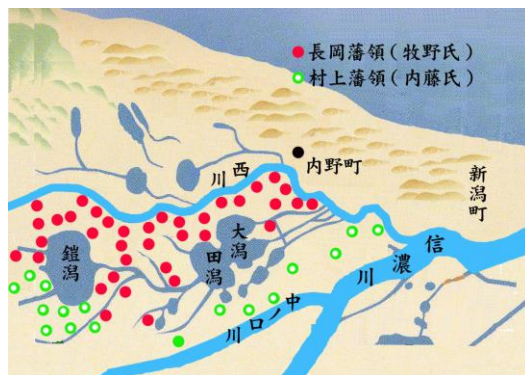
その加盟村々は次の通りであった。

・長岡領 37ヶ村の1万5567石

巻村、葉萱場村、中郷屋村、真田村、漆山村、寺潟村、川井村、柿島村、山島村、天竺堂村、矢島村、押付村、簗屋村、松崎村、遠藤村、横戸村、熊谷村、五之上村、富出村、曾根村、善光寺村、桑山村、明田村、保古野木村、前野村、中野小屋村、升潟村、大潟村、大関村、大友村、笠木村、高山村、榎尾村、高山村新田、新通村、坂井村、五十嵐浜村、

・村上領 15ヶ村の1万3245石

国見村、大曾根村、今井村、茨島村、番屋村、上大原村、下大原村、井隋村、味方村、板井村、木場村、黒鳥村、北場村、亀貝村、小新村、長岡・村上藩を合わせ52ヶ村



堀割に協力した村上、長岡藩の村々 『新潟市史より作図』

◎ 悪水を抜き、水難を逃れるため

文化12年(1815)年、仮取決書を取り交わした。

- (1) 工事費は、長岡領が六割、村上領が四割の割合で負担する。
- (2) 堀割は幅十間(約18m)、堤敷は両岸とも各十間とし、堀割が通る七か村には相応の補償をする。
- (3) 幕領・新発田領・池之端領・三根山領の関係村にも呼び掛け、人足や費用負担について交渉する。
- (4) 長岡領の願人が新潟港との交渉を行う。
- (5) 堀割完成後も早通川の流れに留意し、鎧潟緑りの村々に迷惑をかけない。

五郎左衛門ら18人は、関係村々との交渉が一段落した9月、費用捻出のため、潟浦の新田地と三潟請地の下付を藩へ願い出た。長岡藩はこの願いを受けて同年12月、幕府に堀割工事を許可してよいか伺いの文書を出した。その内容は、堀割予定地を通っている北国街道に橋を架け、その維持には藩も責任を持つことなどを記し、「悪水を抜き、水難を逃れるため」の堀割であることを強調したものであった。

◎ 費用はすべて願人の負担

願人と新潟町との間に最初の合意書が取り交わされたのは翌文化13年7月で、西川の通船を妨げないため、底樋を伏せる工事は西川の迂回路を作って行うという内容であった。

その後、個々の問題について仮取り決めを結んでいき、最終的な取り決めは、工事の始まった後の文政2(1819)年6月であった。この取り決めの中には、堀割には農作業

用の舟以外は通さないとあり、新潟町は高い船が入り込まないよう監視するため番人を置き、その費用は藩が負担することになった。新潟町は堀割の河口が港となることを防いだのである。

内野村との合意が遅れたのは、主に堀割によるつぶれ地の補償問題であった。

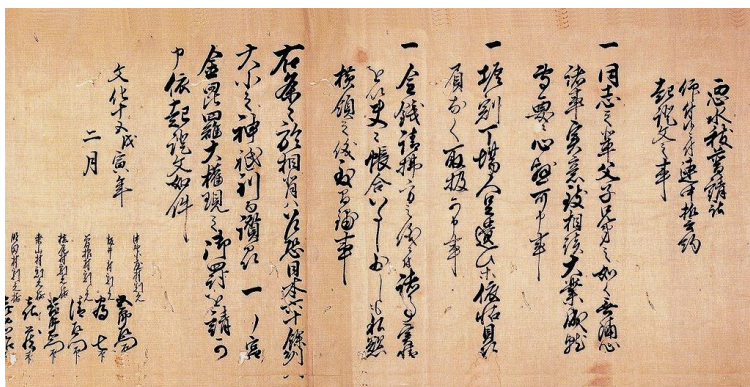
幕府は、長岡藩の伺い書を受けて文化14年11月、長岡藩に堀割掘削の許可を与えた。

許可は「堀割掘削費用は願人の負担の自普請工事とする。工事は、まず砂山高場から海まで掘り、そこが完成した後、幕領内野村から掘りつなぐこと。幕領内を掘削するのであるから、勘定奉行所検使の検分もある。詳しくは勘定奉行から聞くこと」と、砂丘部での堀割工事の順序も指示する細かいものであった。

長岡藩の工事開始命令により、工事は文化15(1818)年2月に開始された。最初に金蔵坂堀割計画が出された元文2(1737)年から数え、およそ80年後であった。

◎ 長岡領の割元・庄屋18名の起証文

一応測量をして見積りをしたが、初めての掘り割りでは不明の点が多く、計画通りに進行するかどうか不安材料が多かった。二回の合同会議で、一家一族離散の悲運にあっても、一致団結するとして、工事完成の起証文を願人18名の連名で記した。

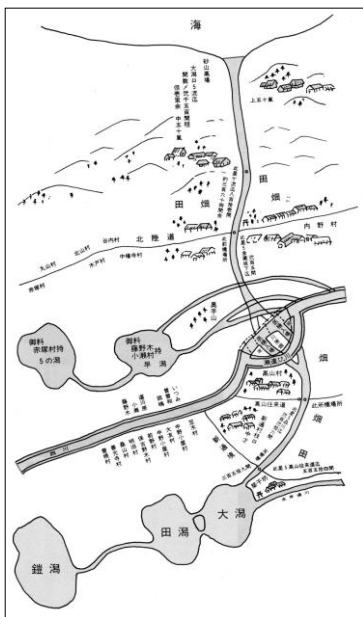


悪水抜普請地主起証文(伊藤 吾郎氏所蔵)
出典:新潟県立博物館 常設展示図録

◎ 新川を西川の下に流す底樋工事

三瀧悪水抜きの新堀割は、大瀧から五十嵐浜まで、長さ約 2400 間（約 4.5 km）、堀幅 10 間（約 18m）、兩岸の堤敷は各 10 間であった。長岡領願人と村上領願人の工事分担は、大瀧から西川までの約 940 間が村上領願人、西川から海までの約 1560 間が長岡領願人であった。架橋は九ヶ所として、北陸道の往還橋は特に丈夫にした。

三瀧悪水抜き絵図（吉田ツタ氏所蔵）
出典：図解「にいがた歴史散歩 新潟」より



この工事において技術的課題が二つとその他多くの難題があった。

第一の技術的問題点は、西川を従来のまま新潟港に通じる舟運路として維持するには、天井川の西川をそのまま流し、新川をその下にくぐらせ流す立体交差しかなかった。蒲原の湿地帯近くの底樋工事であり、工事中の排水をどのように行うかが大きな問題であった。

第二の課題は、砂丘地を掘り割る水路であるため、飛び砂による水路の埋没をいかに防ぐかであった。文化 15 年秋に水路は完成するが、すぐに埋もれてしまい、水路を確保するのにその後も苦勞している。

しかし、新潟町の一番恐れていた西川の決壊による信濃川の減水はなかった。阿賀野川と新川を比べると、新川の流量は極端に少なく、水路勾配もゆるく、新川の底樋を破壊する流量はなく新潟町が心配する事はなかった。

工事費は総額 1 万 5000 両と見積もられ、長岡領が 6 割の 9000 両、村上領が 4 割の 6000 両を負担する予定であった。だが、見積りが甘かった上に、当初予定していた金主が下りたことや、上記の飛砂や水路の藻の繁殖、排水での経費が増大し、後に大きな問題となっていった。

◎ 堀割起工後も金主不在で苦しむ

文化 15 (1818) 年 2 月 9 日、堀割筋の砂浜で村上領・長岡領双方の起工式が行われ、工事が始まった。双方とも榎尾村に旅屋（藩の現場事務所）や番屋を建て、工事の監督や工事関係の事務を執った。長岡領の番屋には、願人惣代やその息子たちが交代で毎日 4 人ずつ出勤し、人足の手配や金の計算などに当たった。また、常勤の藩士も配属されていた。

長岡領では、藩が工事費の代わりに潟浦の新田予定地と三瀧請地を願人に与え、それを元に願人が資金を調達することになっていた。五郎左衛門らの当初の資金計画では、金主を承諾した岩室村高島翁右衛門が工事費の七割を出し、残りは願人が調達することになっていた。

しかし、翁右衛門との話がなぜか着工前に破談になったため、濁川村の豪農真島家に潟浦の新田地半分を抵当に入れ、3000 両を融資してもらい、ようやく工事で着工にこぎつけた。更に、水原町の小町屋（細山）太七と交渉し、新田地の残り三瀧水面の半分を譲渡し、工事の六番丁場（工区）・七番丁場を細山が請け負うことで、3500 両を出してもらって工事を進めた。

◎ 高さ 20mの砂山を開削する金蔵坂の難工事

長岡領の掘削工事は、幕府の指示どおり金蔵坂下の六番丁場と呼ばれる所から海に向けて始められた。金蔵坂と呼ばれる高さ 11 間（約 20 m）の開削は難工事であった。細山が請け負った丁場は特に難航し、他の丁場の人足を回して行われた。毎日何百人もの人足が、砂を「かつぎもっこ」や「背負いかご」に入れて列をなして運び、少しずつ堀割の形をなしてきた。人足には曾根組の外、巻組・河根川組、幕領の西川西郷の村々からの加勢人足と賃雇い人足が充てられた。



金蔵坂を掘削して新川を海に通した 撮影：加藤

当時の様子を、板井村百姓 種村佐平治が「内野金蔵坂 堀割くどき」として残している。

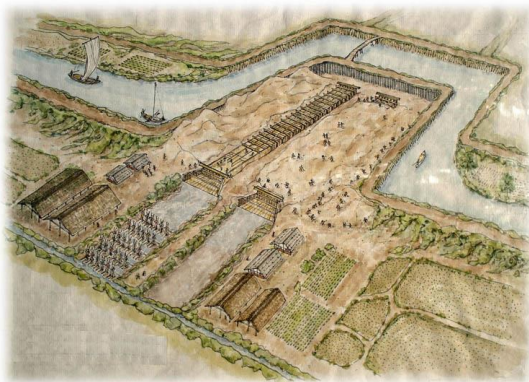
内野村を管轄する幕府出雲崎代官は、金蔵坂から海までの堀割が完成するまで、西川と金蔵坂間の工事着工及び、内野村とのつづれ地補償などの締結を許可しなかった。工事着工から半年余の8月25日、金蔵坂から海までの811間（約 1.5 km）の堀割が完成した。幕府はこの報告を受けて10月、勘定所大貫重八郎以下八人の検分使を派遣した。検分使は5日から9日の間、高山村に泊まって工事の検分を行い、川形（かわなり）や土手、底樋のできばえが見事であると褒め、江戸へ帰っていった。出雲崎代官は、11月になって内野村との補償の締結を許可し、西川と金蔵坂間の掘削が着工された。

西川と金蔵坂間は砂丘が低いこともあり順調に工事が進み、12月18日に一応この年の工事を終了した。しかし、願人達は、人足賃金を全額支払うことができず、人足たちが支払いを求めて騒ぎ立てたため、五郎左衛門が再び小町屋に頼み込み、200両を借り受けてようやく支払い、年を越すことができた。

村上領では、工事終了までは費用を全額藩で支出し、後にその半額を願人の十五か村が返済することで、大瀧口から掘削工事を始めた。燕組・味方組・茨曾根組から加勢人足を得て工事は順調に進み、半年ほどで終了した。

◎ 西川を迂回させ底樋を埋める

底樋の敷設工事は堀割と同じ2月9日から開始された。この工事は、西川の下に堀割の水を通す樋管を埋めて、西川と堀割を立体交差させるものであった。まず、西川の大瀧寄り（右岸側）に瀬違川（迂回路）を掘り、そこへ西川を仮迂回させた後、立体交差部分の底樋工事に移った。西川に敷設する底樋は、幅3間（5.4 m）中間に2本の支柱を入れ、高さ4尺（1.2 m）長さ41間4尺（75m）の木製樋管2門（高山側の底樋は長岡領、榎尾側は村上領が1門ずつ担当）を7間の間隔で並べて、2門とも、樋管大工という専門の大工が松材で製作した。その後底樋の上に覆蓋をし、3尺の置土をして西川の川底とし、通船に支障のないようにした。



新川底樋埋設工事図 絵：細貝 美貴雄

◎ 江戸時代最大級の底樋工事

紀州流土木技術者で、幕府の勘定吟味役普請奉行・井沢弥惣兵衛為永が享保 12 (1727) 年、現埼玉県白岡町の見沼代用水路を開削する際、元荒川の川底に木製の伏越樋を埋設して、元荒川の下を逆サイフォン式にくぐらせた芝山伏越(長さ約 47m、高さ 1.2m、幅 4.2m)がある。

だが、ここに使われた底樋はこれより、長さ・高さ・幅も数段大きく、江戸時代最大級の底樋工事で、越後の技術力の高さを証明している。



逆サイフォンを使用した柴山伏越の開設絵図
現地の説明板より 撮影：加藤

◎ 踏み車 51 台で地下水をくみ出す

しかし、ここは低湿地で地下水位が高いため、その地下水を排除しない限り工事を行うことが出来ない。文政 9 年の二期工事ではあるが、その排水を排除しながらの貴重な工事絵が画かれている。それは踏み車を 4~6 台ずつ 10 段に配置し、合計 51 台で排水を行っていた。



長岡の新潟県立博物館展示の踏み車 撮影：加藤

◎ 十返舎一九の来越『滑稽旅加羅寿』

工事の中心となった内野村は、当時 50 軒ほどの純農村であったが、各村々から 1 日 1000 人もの人足が集まり、村は一躍同辺の在郷町に変身した。そこへ『東海道中膝栗毛』で有名になった十返舎一九が、文政 2 (1819) 年 7 月この地を訪れ、著書「滑稽旅加羅寿」に「内野砂山堀割之図」を書き、「多くの見物人を集める新川工事」と紹介している。



十返舎一九『滑稽旅加羅寿』を模写 絵：細貝 美貴雄

◎ 再三のやり直しで工事は難航

しかし、文政元年冬の季節風は例年のない激しさで、せっかく完成した堀割も、飛砂のために埋まったり、荒波で土手が崩れたりした。翌春には、雪解け水による増水のために土手が崩れ、工事をやり直さなければならなかった。

五郎左衛門らは小町屋に追加出金を願ったが、「修理再工事には一切関わらない」として拒否された。開発条件である願人の自普請が不可能になり、願人たちはやむなく藩に拝借金を出願し、藩はこれを許可した。工事の半ばで曾根組願人の 16 人(途中で 2 名脱落)は資金面で行き詰まり、結局、長岡藩が出金する普請となった。長岡領願人は、文政 2 年 4 月にまず 500 両の貸与を受けて再工事に取り掛かったが、工事は難航し、藩からの貸与は 12 月までに延べ 9 回、合計 4100 両に上った。

◎ 悲願 80 年、三潟の悪水が日本海へ

文政 3 (1820) 年一月、厳冬のさなか、大勢の人々が見守る中で二門の底樋の通水式が行われ、三潟の悪水が堀割から海へ排出された。悪水に苦しむ村々の悲願がかなった。この大潟と日本海を結ぶ新堀割は、いつしか「新川」と呼ばれた。

通水後も付帯工事が続けられ、工事がすべて終了したのは同年 9 月であった。この効果により大潟・田潟の多くが減水して、約 140ha. が良田と化し、文政 4 年には築千坊新田、玄的新田、貝柄新田などの新しい村々ができ、卯八郎受などの共同開墾した田が七か所も出来上がった。これでようやく安心しての田植えによる収穫が得られるようになった。

長岡藩は新川が完成したことを祝い 11 月、工事関係者の褒賞を行った。



三潟と立体交差図 『新潟市史より作図』

◎ 総工費 2 万 1000 両、人足は延べ 165 万人

新川掘削に要した総費用は、五郎左衛門の記録によると、長岡領が 1 万 8376 両余、村上領が 3291 両余の計 2 万 1667 両余と巨額であった。人足数は双方合わせて、延べ 165 万 2700 人に上った。

長岡領工事費の資金計画は、五郎左衛門の当初予定では、金主の出金 6300 両と願人の負担 2700 両の計 9000 両であった。しかし、実際に

要した工事費はその 2 倍以上の 1 万 8376 両余であった。

さらに、工事着工前に予定していた金主が抜けたため、願人たちの資金計画は大きく狂った。願人たちは、前述のように濁川村の真島家から 3000 両、水原町の小町屋から 3700 両を借り入れて文政元年の工事費を賄った。続く文政 2・3 年の工事には金策も尽き、藩からの拝借金は 2 年が 4100 両、3 年が 1160 両となった。

願人たちは負担金を調達するため、それぞれが所有する役禄を売ったり質入れしたりし、その合計は 4223 両になった。更に新川が完成した後も、翌 4 年には崩れた川岸や橋の修理、同 8 年には改修工事などを藩に頼らざるをえず、藩からの拝借金は文政 2 年から天保元 (1830) 年までの 11 年間で、1 万 2617 両に達した。



家も処分した伊藤家の楼門は、西川の善光寺へ 撮影：加藤

村上領では、藩がいったん工事費の全額を支出し、工事が完成して新田開発も一段落した後、15 か村が半額を返済することになっていた。

文政 5 (1822) 年 4 月、藩は「水難の困窮からまだまだ回復できず、村々の百姓が難渋しているので、格別の御慈悲をもって上納金は免除する」と達した。村上領では結果的に全額を藩が負担したのである。

第三章 新川改修と上知令、三潟の開発

◆ 恐れていた三潟上知が現実

文政3(1820)年の悪水抜き堀割の完成で、田潟と大潟はたちまち減水して潟縁は干上がった。長岡藩は周辺の庄屋にこの土地の開発を命じ、文政7年(1824)大潟周辺開発地の検地を行い10カ新田に村名をつけた。面積238町歩余、石高2624石余りの広大な新田地ができ、新田17ヶ村が成立した。

新川の完成により、幕領の多い西川西郷(西川左岸側)の排水も進んだ。西川西郷の基幹排水路である広通江は、それまで西川に流れ込んでいたが、新川に切り落とされたため、排水機能が高まった。幕領では、広通江につながっている乳ノ潟と早潟が開発され姿を消した。



新川開削後の三潟周辺図 出典：新潟市史

幕府は文政9年8月、三潟新田地調査の役人を派遣し、ついで同10年3月鎧潟、田潟、大潟の上知命令を長岡藩に出し、安永年間に長岡藩が上知した9ヶ新田のうち、5ヶ新田を代替地として戻した。長岡藩が最も恐れていた上知令が現実のものとなった。

長岡藩は文政10年に三潟が上知されると、新川掘削の長岡領願人16人の救済策をとった。願人たちが、新川の掘削によって抱えた負債残高は、合計5544両もあったという。

◎ 底樋一門増設の第二期工事(文政の改修)

新川の完成によって、周辺の開発が進んだ。しかし、新川は飛砂によって川底が浅くなり、藻も発生したりして次第に流れが悪くなっていった。新川の流れを良くするために、長岡領潟組は村上領の村とともに、文政8(1825)年、底樋を一門増設し、新川を拡幅することを計画した。当初、幕領の西川西郷の村は、用排水などの理由から同意しなかったが、その後の話し合いで、文政9年6月に、長岡・村上領双方の惣代と西川西郷の惣代は、次のように合意した。

- (1) 増設する底樋は、幅6間(約10.8m)とし、増設に伴い底樋口から海までは、新川の川幅を5間広げ、15間(約27m)とする。
- (2) 拡幅分の補償は、文化年中の規定どおりに算出して内野村へ払う。
- (3) 広通江の新川への新たな付け替え工事は、長岡・村上領双方の人足で行う。

長岡領では、願人が藩から4100両を借り、村上領では藩が経費を負担、同年工事に着手した。工事は文政初年の工事と同様、西川の迂回路を造ってから新規の底樋(双領樋)1門を敷設し、新川を拡幅して文政10年に完成した。



三潟水抜絵図(笛木一之氏所蔵)
出典：『新潟市史 資料編4』

◎ 地震、増水で相次ぐ底樋破損

文政 11 (1828) 年 11 月 12 日に起こった三条地震は、中・下越一帯に大被害を与えた。底樋も地震のために板の継ぎ目が破損し、16 日には前年に増設したばかりの双領樋から水が吹き出す状態になった。急いで応急修理を行い、12 月 17 日までに一応防ぎ止めることができたが、この費用は 1050 両余に達した。

双領樋の本格的修理は、西川の迂回路を造らずに行うことになり、西川の渇水期を待って文政 13 (12 月天保改元) 年 7 月に始められた。しかし、完成寸前の同月 26 日の洪水で再度破損したため、渇水期が終わる 8 月に不完全ながら修理を終わらせた。この経費は 1020 両であった。

さらに、翌天保 2 年 2 月には雪解け水のため、またも底樋の継ぎ目が破損し、700 両をかけて応急修理をしたが、抜本的な修理が必要な状態であった。これらの修理費用は長岡・村上領とも藩の負担であった。

◎ 底樋二門増設の第三期工事 (天保の改修)

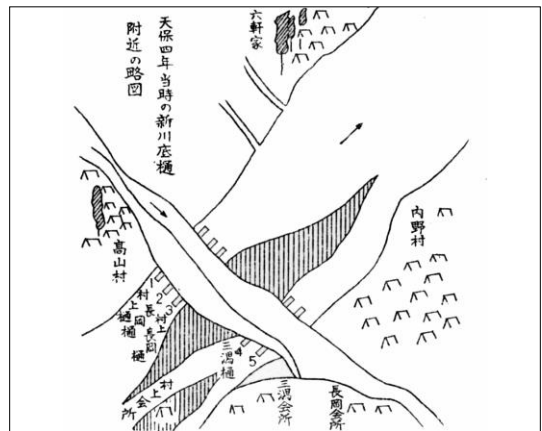
天保 4 年 5 月に着工した 1 年目の工事は、破損した 6 間樋を 4 間幅に縮める改修工事と、同規模の底樋二門の増設工事であった。

西川に伏せる底樋は、高さ 4 尺 (約 1.2m)、幅四間 (約 7.2m)、長さ 41 間余 (約 74m) の樋管二門をまず増設し、排水の状態が悪ければ

もう一門増設し計五門とする。(内一本は文政 8 年に増設した幅六間の樋を四間に作り直した) 願人樋と呼ぶ。この年は全国的な大飢饉で諸物価は暴騰し、人夫賃も三倍に跳ね上がり、願人たちの資金面での苦労は大変なものだった。

2 年目は内野新川の川幅を 15 間 (約 27m) から 25 間 (約 45m)、橋も 10 間ずつ延ばすなどの拡幅する工事であった。願人は「借りられるだけ借りましたが破産し、一金の入手も出来なくなった」と述べて総代役御免を願い出したが許されなかった。工事は 7 月中に終わった。

3、4 年目は、曲がりくねった早通川をまっ直ぐにして川幅を拡幅する工事で、天保 7 年 (1836) 9 月に完工した。中郷屋村 (旧西蒲原郡巻町) 庄屋藤右衛門の記録では、完成までに要した総費用は約 4700 両、人足は延べ 17 万 4000 人であった。



天保 4 年新川底樋付近の図 出典:『内野町史』



立体交差図 『新潟市史より作図』

◎ 相次いだ三瀧開発権の変遷

嘉永 4 (1851) 年、幕領与兵衛野新田 (新潟市) の藤十郎と関兵衛が、三瀧の開発願いを出雲崎代官所に提出した。

出雲崎代官所はこれを許可し、翌 5 年に三瀧開発権は巻組から藤十郎らに移った。その際の巻組の藤十郎への譲渡金は 350 両であった。

その後開発権は、開発が進展しないまま文久 2 (1862) 年、藤十郎から村上領亀貝村庄屋坂井庄左衛門・坂井村 (新潟市) 庄屋荻野伝左衛門・黒鳥村 (新潟市) 庄屋鷲尾利忠治へと譲渡された。さらに慶応 3 (1867) 年には、庄左衛門が病気のため、木場村 (新潟市) 庄屋山際郡司が代願人となり明治を迎えた。

◎ 慶応の底樋伏せ替え工事

天保の改修から 30 年たった慶応の頃、底樋の腐朽は甚だしく、文久 2 年 (1862) 木場村 (新潟市) の破堤をはじめとした洪水が続き底樋五門が大破した。そのため排水機能が著しく低下して、新川掘削以前の状況に戻ってしまった。またもや、底樋の修理が緊急の課題となった。

慶応 2 (1866) 年 11 月、幕府水原代官は手代を三条に派遣し、長岡藩郡奉行と村上藩三条代官及び関係村の惣代を呼んで、底樋の修理について協議するよう命じた。

翌 3 年 2 月、長岡・村上双領の惣代は改修工事の取り決めを結んだ。その主な内容は、古い底樋五門を撤去し、新しい底樋と交換することである。底樋の敷設は、西川を地藏堂 (燕市) で締め切って水量を減らし、西川の水を底樋敷設箇所やや上流から、新川の海側へ切り落として行方方法が採られた。加勢人足は双領で出し、費用は長岡領・村上領の折半であった。

新しい底樋五門の内訳は、瀧組願人樋が二門、

長岡領樋・村上領樋・双領樋が各 1 門で、底樋の規格は高さ 6 尺 (約 1.8m)、幅 3 間 (約 5.4 m)、長さ 36 間 (約 65m) であったが、長岡領樋だけは古材を用いるため高さ 4 尺 (約 1.2m) であった。今回の工事では、海水の逆流を防ぐ逆水扉が工夫されて取り付けられた。



逆流防止扉の付いた底樋模型 出典：新潟市史 資料編

戊辰戦争の始まった慶応 4 (1868) 年 3 月、西川の締め切り工事と切り落とし工事が完成し、4 月から底樋の敷設工事を始めた。底樋箇所の上下両側を締め切って新川の水をせき止め、西川底の古い底樋を掘り出し、新規の五門を伏せ入れた。絶えずわき出る水をくみ出しながらの工事に、初めてポンプが使用された。また、西川の切り落とし口が広通江にかかるため、広通江の付け替え工事も行われた。底樋伏せ替え工事は、まれな好天に恵まれた上、五門が競争しての突貫工事だったため思いの外早く進み、6 月 6 日に最後の長岡領樋が敷設されて終了した。新川は、また悪水抜き堀割としての機能を取り戻し、荒涼とした多くの寒村に美田への道が開けた。

とはいえ西蒲原北部は、その後も洪水に悩まされ続けた。この地域が洪水の被害から解放されたのは、大河津分水の開通以後である。

◎ 紫雲寺潟開削と三潟開削の違い

1) 堀割完成後の効果

越後平野の治水策は、全て平野部を流下し氾濫する河川を、中流部において浜方の砂丘帯を堀割って海へ落とし、低平氾濫地を干陸させて治水し、その後利水を行う形であった。

北蒲原郡の紫雲寺潟、阿賀野川の福島潟と新井郷川流域、そして上越の保倉川等の開発はこれであった。

北蒲原の紫雲寺潟は、地形が扇状地的であり海との標高差があった。そのため、砂丘帯を堀割って湛水を切り落としすれば、周辺の外水の氾濫は比較的少なく、洪水の通過が極めて早いものであった。

しかし、この三潟周辺の地形は、中ノ口川、西川に囲まれた海拔 0m 地帯であり、海との勾配も 6000 分の 1 と極めて低く、底樋の効果が出にくい状況にあった。

そのため新川の完成後も常に湛水に農民は苦しみ、僅か 40 年の間に 4 回も、農民技術による自前の改修工事を行わざるを得なかった。

2) 願人の投資と負担

紫雲寺潟、三潟ともに潟の干拓後、幕府に上知させられている。だが紫雲寺潟では、願人の竹前は、竹前新田として 500 町歩の権利を得ることになった。一方三潟水抜排水事業においての願人、特に長岡藩領の願人となった十六か村の村庄屋は、工事成功の際には三潟の水面 391 町歩、沼地 238 町歩の開発地への投資を目的していたにしても、この代償はあまりに大きく還元途を失って終わったことは、その家の没落を引き起した。

このような場合北蒲原地方の動きなどでは、一挙に開発資金供与の地主豪商等に開発地利権が移動すると共に、中小地主の土地所有が一括

巨大所有の中に兼併されている。

新川開削及び底樋改修の一大事業は、時の支配者の命により行われたものでなく、この土地に住む農民達の熱烈な願望と、莫大な犠牲によってなされたものであるだけに意義は大きい。

3) 工事技術と新潟町の不安

西蒲原平坦流末部の新川底樋工事は、先進的施行例の紫雲寺潟の干拓工事に成功に触発されたものであった。

しかし、農民だけの底樋埋設の自普請技術は、天下普請の見沼代用水工事に比較しても劣るものでなく、天下に誇る素晴らしいものがあつた。だが、どこからこの工事の技術を習ったのか、指導者は居たのか、現在の資料からは答えは出ていない。

一方、新潟町が最も不安材料としていた信濃川河口の減水問題は、新川開削と松ヶ崎堀割とを比べ、阿賀野川の水量と新川の水量が極端の違いから、問題とならなかった。

幕末の一時期、内野町を含む西蒲原郡の 5 万石が会津藩領となった。会津藩は山国であったため阿賀野川に通じる港が欲しく、現在の関屋分水近くに港を作る計画を立てた。だが新潟町の反対で実現しなかった。この堀割工事がもし行われていたなら、信濃川の河口のひとつが関屋になっていた可能性は大きい。



西蒲原郡付近の潟 出典：新潟市史 通史編2 近世

◎ 進まなかった坂井輪郷の排水問題

文政3(1820)年に通水した新川は、湛水に悩む三潟下流の農民たちの長年の夢をかなえるものであったが、西川末端に位置する坂井輪郷から水害は無くならなかった。むしろ新川通水後西川は完全な天井川となり、坂井輪地区の湛水の吐け口が無くなったからである。

このため坂井輪郷の排水のためには金蔵坂よりも西川の下流でもう一本、海へ放流する堀割が必要であった。関屋地区や青山地区を掘り割る案が幾度か計画されたが、すべて新潟町の反対で実現しなかった。

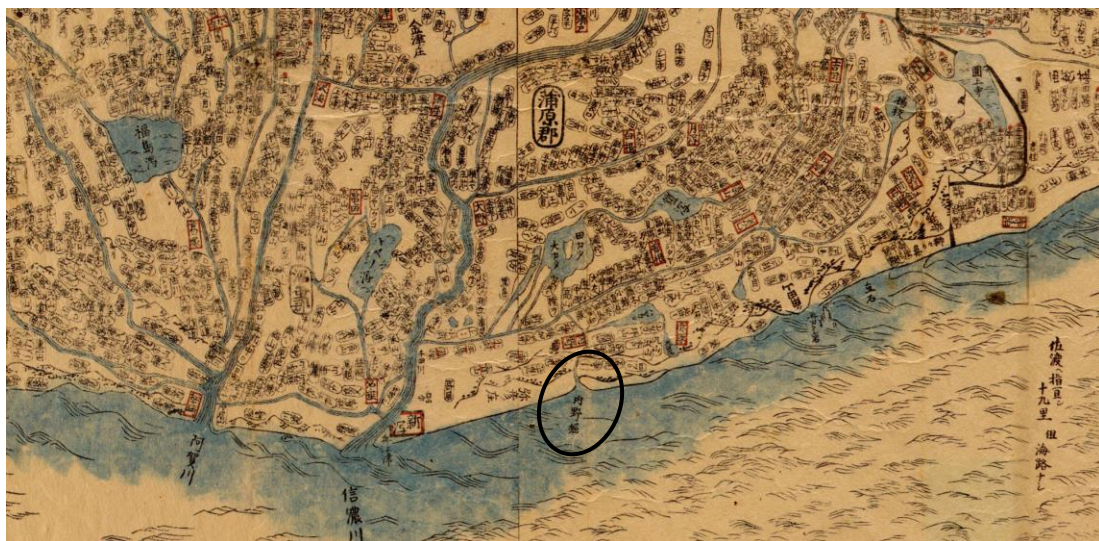
嘉永4(1851)年、坂井輪郷十四か村は、青山村下の砂丘を掘り割りたいと新潟奉行へ願い出た。この堀割は、平島地内で西川に底樋二門を伏せ、西川右岸の小新・亀貝、黒鳥・北場地内の悪水も海へ排水するものであった。これまで、何度も青山下堀割計画を退けてきた新潟町は、当然強く反対した。そのため坂井輪郷の村々は翌5年、さらに6年にも願書を新潟奉行へ提出した。

6年の願書では、この堀割は坂井輪郷の悪水だけを排水するもので、三潟排水のように大規

模な堀割ではない、亀貝村から中ノロ川までの間には丈夫な土手があり、三潟の水は流れて来ない、中ノロ川は今まで坂井輪郷内で破堤したことがない、などと訴えたが、結局新潟町の反対で許可されなかった。

海への放水路計画が進まなかったため、万延元(1860)年、西川左岸の坂井輪郷九か村は信濃川へ排水する新たな堀割掘削を願い出た。この堀割は、関屋村から新発田領西鳥屋野島(現白山浦)を通り、新潟白山社裏で信濃川へ排水する経路であった。しかし、この堀割は工事開始後間もなく、関屋島村地内が信濃川の浸食を受けたため通水の見通しが立たなくなり、実現できなかった。

文久2(1862)年、会津藩主・松平容保が京都守護職に任命された翌年、関屋から坂井輪までの十六か村が会津領となった。会津藩では自領内に港が欲しかったこともあり、坂井輪郷の悪水を海へ放流する計画を立てたが、松ヶ崎堀割の際の約定「新潟港より十里以内、堀割工事を行わない」の取り決めもあって堀割計画を断念した。これにより坂井輪郷の排水問題は、江戸時代には大きく前進することがなかった。



越後国細見図には内野堀と書かれている 出展：新潟県立博物館 常設展示図録

三瀧悪水抜掘割計画実施年表

計画月日	計画者	掘割計画	結果
元文 2.6 (1737)		五十嵐掘割	小阿賀野川堰入普請見聞に来越した幕吏番利兵衛に請願した者があり、新潟町民の意見を求めた処絶体反対のため中止となる。
元文 4 (1739)		坂井輪村地内西川掘替	新潟町民の反対で願書は却下された。
元文 5.4 (1740)		鑑潟新田開発(西川下を底樋を以つて閑屋御蔵堀へ落とす計画)	請願が出された。
寛保 3 (1743)	巻・曾根両組	底樋伏設、五十嵐浜掘削計画	両組より出願したので、翌延享元年2月新潟町民は町奉行に反対請願をした。
宝暦 6.4 (1756)	巻・曾根両組	同上	両組より請願したので、代官岩出伊右衛門が見分したが、新潟町民の反対で沙汰止みとなった。
明和 5.8 (1768)	巻・曾根両組	同上	
天明 元 (1781)	栃尾組吉水新田庄屋彦六	西川底樋伏設金蔵坂掘割	出願したがそのまま沙汰止み。
天明 7.12 (1787)	亀貝村庄屋坂井庄左衛門、北山新田庄屋畠山園左衛門、田島村庄屋玉木常右衛門	悪水排除、新田開発	天明7年出願寛政8年白川侯の手を経て施行を願出で、幕吏与八郎(姓不詳)見分役として来越したが成功せず、与八郎は御用手違いにより永代小普請入となつた。
文化 元7 (1804)	新潟町寺山両助、池田言兵衛、平島村甚右衛門	三瀧悪水抜	長岡藩に願出たが不成功、寺山は新潟町民でありながら、町に不利益の行動をしたと市民の反感を買った。
文化 12 (1815)	伊藤五郎左衛門	金蔵坂掘割	同年10月幕府は役人を見分させ、しばしば新潟町と交渉を重ね文化15年4月許可となり、文政元年2月着工、同3年完成し、新川と云った。
文政元年 (1818~30)	長岡、村上、両領庄屋一統	西川底樋及び新川拡張	新川の巾を15間に、底樋の巾を6間に拡張した。
文政 11 (1828)	青山村始め近隣8か村	田面排水のため砂丘を開削海へ落とす計画	新潟町民これを聞き、激昂して反対し程なく停止。
文政 13 (1830)	巻村南須原平吾外5名	三瀧開墾水田化計画(平島の開削)	幕命により計画、湛水排除により更に泥を排除するため、青山村、平島村横土居脇の開削を計画し設計絵図を上呈した。同年5月幕府代官を派遣して検分させたが、新潟町の反対で成功せず。
天保 4.3 (1833)		新川巾拡張と金蔵坂西川底樋増設	青山村平島開削の代案として新川の巾を25間に拡張し、底樋2管を増設する事に新潟側と交渉妥協成立した。(底樋は合せて5管となつた。
元治 元 (1864)	(会津藩)	(平島掘割事件)	会津藩主は、元治元年青山村以南20余か村を含む5万石加増となつたが、かねてより会津藩の平島分水計画の風聞あり、新潟町民の訴訟により、この年4月幕吏来港して検分したが、幕吏政事多端遂に実現するに至らなかった。

新川の底樋と川幅の推移

年次	事項	主要工事	事業費 入足	新川の 川幅	底樋の大きさ		断面指数
					幅×高さ×長さ	数	
1818~1820		新川掘削、底樋2門	2.6万両	10間	3間×4尺×42間(5.4m×1.2m×76m)	2	100
1826		川幅拡張、1門増設	300万人	15間	6間×4尺×41間(10.8m×1.2m×74m)	3	200
1833~1835		川幅拡張、2門増設	1万2千両	25間	4間×4尺×38間(7.2m×1.2m×68m)	5	333
1867		底樋新設、逆水門	7万4千両	25間	3間×6尺×36間(5.4m×1.8m×65m)	5	375
1902~1912		煉瓦コンクリート暗渠	20万7524円	37間	3間×10尺×12間(5.4m×3m×22m)	9	1125

第四章 明治以降の新川の変遷

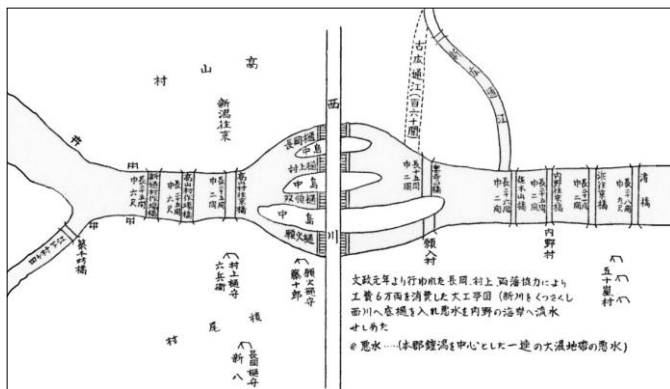
◆ 江戸～明治～昭和へ管理組合の変遷

明治元（1868）年11月、三瀨周辺双領52か村の庄屋は新潟民政局へ「三瀨地方は昔から低湿で悪水抜きに苦勞してきたが、地元願人庄屋の献身的尽力で堀割と底樋が完成し、豊かな美田となった。その管理には永年領主からの助成を得てきており、今後も従来どおりの助成を」と願い出た。その後、同じ水縁り村々で組合に加入せず、利益だけ得ていた村々も含めて新たな底樋組が結成され、県の管轄下に入った。

当時旧村単位で構成されていた用排水機構は、明治中期に至り地域的広がりを持つ水利組合へと発展となり、明治27（1894）年排水対策を主体とした、新川普通水利組合が設立され郡役所が管理し、大正15（1926）年の郡役所廃止後は県が、昭和17年には地方事務所がそれぞれ管理した。

尚、排水対策を業務とした広通江普通水利組合と、用排水対策の西川西部普通水利組合が明治34年に設立された。更に、用排水対策の上郷普通水利組が明治39年、そして用水のみの西川北部普通水利組合が昭和9年に設立された。

戦後、土地改良法の制定に伴い、昭和26年全ての水利組合は解散し、用排水対策・農地整備のための西蒲原郡土地改良区へ移管され、現在に至っている。



◎ 外人技師も新川工事を高く評価

明治5（1872）年、明治政府の内務省に招かれて日本にきたオランダ人I・A・リンドウ技師（1872来日－75帰国）が越後に来ている。

オランダは堤防を築き、低湿地を干拓することで国土を広げた国である。その干拓・治水技術を明治政府は高く評価し、当時の日本の河川、港湾などを専門の目で検証してもらうために呼んだ技術者である。

日本での彼の功績は、日本で最初の量水標や水準原標を作り、河川工事の基準となる高さを決めたことである。当時の日本では、家や畑などを水害などから守るための河川工事をするためには、河の水の高さ（水位）を知ることが必要であったが、当時の日本ではその観測や測量を行っていなかった。

彼の報告文の中に「新潟旅行記・信州路回り、帰路三国峠」がある。その中で彼は、新潟市内野の西川と新川の立体交差を見学し、これを「日本の巧みな技術として評価していた。」



I・A・リンドウ

出典：L. A. Van Gastern 他

『IN EEN JAPANESE STROOMVERSNELLING』

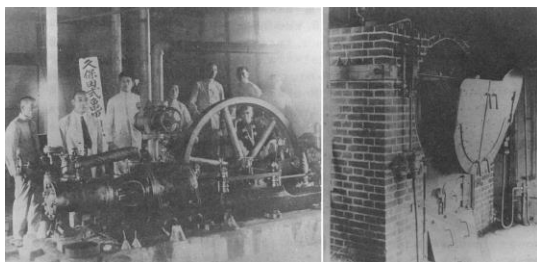
Euro Book Production. 2000. P142

◎ 排水機の登場

耕地の湛水を排除する方法として先人のとった方法は、第一に外からの水を防ぐための堤防強化であり、第二に内部湛水の排除であった。第一の堤防については各集落の囲い土手であり、現在も多くを見る事ができる。第二の内部湛水の排除は踏車による排除であるが、人力の限界があった。

明治の産業発達の幕開けによる機械力による排水方法の出現は、西蒲原郡を大いに力づけ下記に示す如く多くの排水機を導入した。

明治2年5月鎧郷村真田で、石炭機械による排水機を手始めに、明治3年6月の漆山四ヶ大字普通水利組合の蒸気による排水機など、地主を中心とした排水改良事業が低平地に大きな変革をもたらした。



蒸気機関を使った排水ポンプ 出展：『しんかわ』

◎ 蒲原平野を押し流した「横田切れ」

1896（明治29）年7月22日、新潟県西蒲原郡横田村（分水町を経て現：燕市横田地区）の堤防の部分が約300mに渡って決壊した。これにより新潟市関屋までの広い範囲が浸水した。被害は水害による直接死傷者78人、被害面積は18,000ha、床下・床上浸水が合わせて43,600戸で、そのうち家屋流出は25,000戸であった。

西蒲原一帯を押し流して1万8000町歩の水田を泥の海と化した「横田切れ」の痕跡は、西川水路橋に近い榎尾の「宝光院」本堂の柱に、水位の痕がくっきりと残っている。



宝光院前の水害水位標 撮影：加藤

「横田くどき」

やれやれ皆様洪水騒ぎ
山の果てから海ぎわまでも
田畑そうたい家屋も水で
濡れて流れて見る目も哀れ
茄子や豆など何れも腐れ
胡瓜南瓜はつる皆枯れた
瓜も西瓜も食うこと出来ず
稲も枯れては米値は高く
味噌を損して塩のみなめる

この水害により、三島郡大河津村（現：燕市大川津）から同郡野積村（寺泊町を経て現：長岡市）までの約10kmの区間に分水路の建設の聲が高まった。大河津分水は1909（明治42）年に建設が始まり、1922（大正11）年に通水した。



横田切れ当時の洪水氾濫域現地の説明板より 撮影：加藤



横田切れの碑 撮影：加藤

◎ 「奥手山橋」より「大萩橋」に改名

底樋も慶応の改修から 30 余年を経て老朽化し、明治 29 年の横田切れの大洪水以来通水能力の減退が目立つようになった。明治 39 年（1906）年、阿部県知事は根本的改修を考え底樋を近代的なものにすべく、河川法を適用し五門の底樋から九門に増設する大改修を県営工事で行うと発表した。

広通江普通水利組合は県と新川普通水利組合に対し九門の増設に伴い新川の水位が上昇し広通江の排水を阻害する恐れがあると先祖の取り決めた契約書を盾に実力阻止も辞さずとして一触即発の危機となった。

この対立を調停したのが旧中之島町出身の衆議院議員の大竹貫一と旧黒埼町板井出身の萩野左門（後の新潟市長）で広通江の吐け口を新たに広通川として新川下流の月見橋脇に作り、その工事費を新川普通水利組合が負担すると言う条件で騒動は未然に防止された。この功績を称え二人の一字を取り旧名「奥手山橋」を「大萩橋」と改名された。



改名された大萩橋 撮影：加藤

◎ 舟が主役だった西蒲原の農業

湿地帯の広がる三潟地方の稲作は、想像を越えた過酷な農作業であった。蛙から身を守るために「ひるたび」「股引」を履いての農作業は、多大な労苦を強いるものであった。

その苦労を少し肩代わりしたのが農舟であった。村々の耕地が分散し、入り組みつつ、遠くまで続く西蒲原の割地制度耕作地への往来に農舟は必須そのものであった。

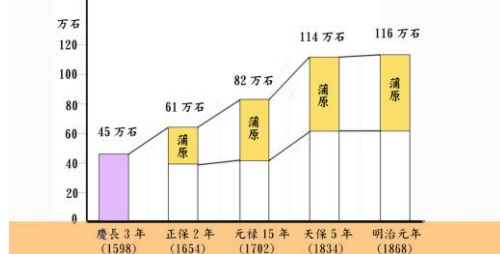
刈り取った稲を運ぶため、そして田畑への客土運搬、更に農舟は集落の人の日常の足として、車が登場するまで移動や運搬の主役であった。農舟は長さ 2 間半、幅 2 尺程度、板合わせ、鴨合わせ、稲積舟と呼ばれていた。



農作業に使われていた田舟 出典：西蒲原土地改良区所蔵

◎ 西蒲原郡の米生産高

毎年のように水害に悩まされた三潟地方であったが、新川が完成してから潟や沼は次々に田んぼへ生まれ変わっていった。これでようやく安心しての田植えによる収穫が得られるようになり、蒲原郡の米の収穫高は、180 年前と比べ 2 倍以上の 50 万石に増えた。



蒲原郡の米生産高の推移 出典：『新潟市史より』

◆ 西蒲原の総村数と石高

元禄 13 (1700) 年の郷帳 293 ケ村、72,591 石
天保 5 (1834) 年の郷帳 338 ケ村、152,517 石
明治 元 (1868) 年の郷帳 369 ケ村、155,000 石

◎ 西川改良及び新川九門暗閘工事

この工事は、西川の改修を図ると共に横断している新川の悪水を、西川の川底を出来るだけ効率よく通水するための施設とした。設置場所は、旧底樋よりやや上流の位置に移動した。

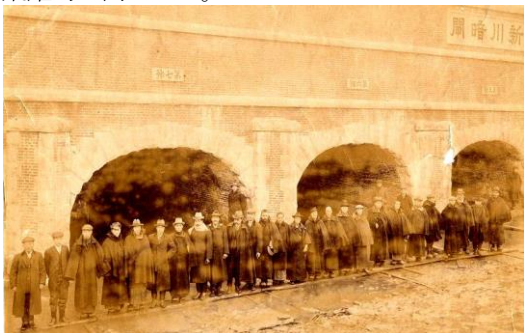
アーチ部には煉瓦を使い、川底には花崗岩を敷き、側壁を鉄筋コンクリートで構築し、アーチ型九門の暗閘に海水の逆流を防ぐため木製扉二枚づつを全暗閘に取付けたものであった。



新川暗閘下流側の扉 出典：西蒲原土地改良区所蔵

尚、暗閘前後の河床を丈夫にするため、上流側と下流側を鉄筋コンクリートで固めた。このセメントは海路新潟港に搬入し、そこから川船に載せ替えて信濃川と西川を経て現場に搬入したものであった。花崗岩は、東蒲原郡馬下の石山から切り出し、阿賀野川を下って西川経由で運ばれた。また煉瓦は、そのために榎尾村に工場が建てられ、そこで瓦を焼いて使用した。

明治42年改修に着手、高さ10尺（約3m）、半径3間（約5.5m）、幅70尺（約21m）、長さ38間（68m）のアーチ型の暗閘（底樋）九門が大正2年（1913）に完成し、新川の排水能力が飛躍的に向上した。



完成直後の新川暗閘 出典：西蒲原土地改良区所蔵

◎ 西川の水運

西川は古くから西蒲原の動脈であり、江戸時代蒲原船道（別名西川船道、新潟船道）と呼ばれる川船仲間が36隻の大艀船（コウレンボウ＝大型の川船）を使用して、西川舟運に従事していた。

主として長岡藩内の特に巻、曾根の蒲原組の年貢米の輸送に当たったが、商人の荷も取り扱った。西川沿いには吉田、曾根、内野、坂井、平島など数ヶ所に渡船場があった。

明治17（1884）年、栗林重三郎氏が蒸気船・西川丸（9 吨）で、新潟～吉田間の運航を始めた。だが、西川は水位増減が激しい上に土砂で埋まることが多く、運航したり停止したりで、明治20年には運航をあきらめた。

新川暗閘建設の際も西川及び新川の舟運を意識して、新川と西川に乗り入れできる閘門施設の検討を行っていた。又、新川、西川、広通江の三川の舟運検討も行っており、新潟にとって西川の水運がいかに重要であったかが理解できる。

水路橋の完成した昭和30年11月の時には川舟程度の小舟は通行できるようになっていたが、社会情勢の変化で西川を通る舟も少なくなっていたことと、水路橋の両側が改造されて、舟の通行は大幅に制限され、現在の水路橋では船が通ることは出来ない状態である。



新川暗閘内の西川を通る船
出典：柏崎図書館所蔵

◎ 底樋→川が立体交差する西川水路橋へ

新川は西蒲原郡南東部の排水幹川である大通川、新木山川、飛落川、及び旧鎧潟沿岸の悪水を集めた鎧潟に源を發し、新川左岸からの広通江と両沿岸区域の悪水をも合わせて流下し、その全流域は2万7,412ha.あり、西蒲原郡最大の排水幹川である。

しかし、新川の勾配は甚だ緩く川底に泥が堆積し、河身は曲折して流水を妨げ流速は緩慢であった。更に、近年各排水区の機械排水が発達し、用排水機が急増して来たため、悪水は可及的速やかに日本海へ放流する必要が生じてきた。

ところが新川暗閘建設以来 40 余年を経て閘底には土砂が沈積し、九連の暗閘中三連は半閉塞状態になって流水を妨げ、そのため上下流に落差を生じ、湛水被害増大の曲折にあった。

昭和 29 年、農林省直営の国家事業として暗閘を撤去し、新川の水を直流させて海に流し、その上に鋼造のトラス水路橋を架けて西川と新川を立体交差させることになった。施行場所は、旧九門暗閘より 10 間（約 18m）上流の地先であった。

当時鉄道と自動車の普及で、西川の水運は皆無に近くなっていたが、排水量 50 トンの船が通過し得るためと、灌漑用水供給のための水路設計となっていた。



昭和 30 年完成直後の西川水路橋
提供：青池 国政氏

◎ 不要となった新川暗閘を破壊

新川水路橋竣工に伴い不要となった煉瓦コンクリートづくりの新川暗閘はダイナマイトによる破壊で撤去されたが、頑強につくられた暗閘は容易に壊れなかった。

明治中期から昭和の始めにかけて建設された煉瓦づくりの水門等は、現在「日本の近代土木遺産」に多く登録・保存されている。おそらく新川暗閘も残っていたなら「近代土木遺産」となって、後世の私たちに多くの夢を語りかけてくれたのであろうが残念であるが今は写真でその面影を見るほかない。

◎ 昭和 46 年、鎧潟も姿を消す

かつて西蒲原に東西 26 町、南北 11 町、600ha.の鎧潟があり、魚や菱などの自然の恵みにより、近隣の村々で定期的に市場が開かれていた。

明治中期より排水機を設置しての三潟干拓が始まり、大潟・田潟は昭和 23 年までに干拓された。その後の新川排水事業の急展開による排水機構の再編成と、第二次世界大戦後の食料増産と機械化の促進による過剰農業人口対策とあいまって、鎧潟干拓の本格的な陸地化・圃場整備が昭和 30 年代に行われ、昭和 46（1971）年、最後まで残っていた鎧潟も完全に消滅し、かつての三潟の面影は完全に消えた。この事業で造成された水田は、234ha.である。



「ここに鎧潟 ありき」碑 撮影：加藤

◎ 東洋一の新川河口排水機場完成

文政 3 (1820) 年に新川が完成し、西蒲原郡 274 km³ の排水は全て新川が引き受けてきた。新川はもともと勾配が緩やかなうえ、川底に泥がたまり易くなっていた。更に、昭和 30 年頃からの地盤沈下で、沿線排水施設の能力が低下していた。そのためこれを補いかつ、効果的な広域排水制御システムの必要にせまられていた。

新川河口排水機場は、農林省の国営新川二期農業水利事業によって昭和 43 年 3 月工事を着工、昭和 47 年 3 月に完成した。

この排水機場は海へ自然排水する樋門と、強制的に排水するポンプ 6 台とに分かれている。通常新川の水は、自然排水樋門から海に出てゆくが、海の水位が高い場合や大雨の場合は樋門を閉めてポンプで強制的に排水するシステムとなった。



昭和 47 年完成した新川の河口排水機場 撮影：加藤

この新川河口排水機場は、50m プールが 2 秒で満杯となる、毎秒 240m³/s の排水能力を有し、建設当時は東洋最大級のものであった。

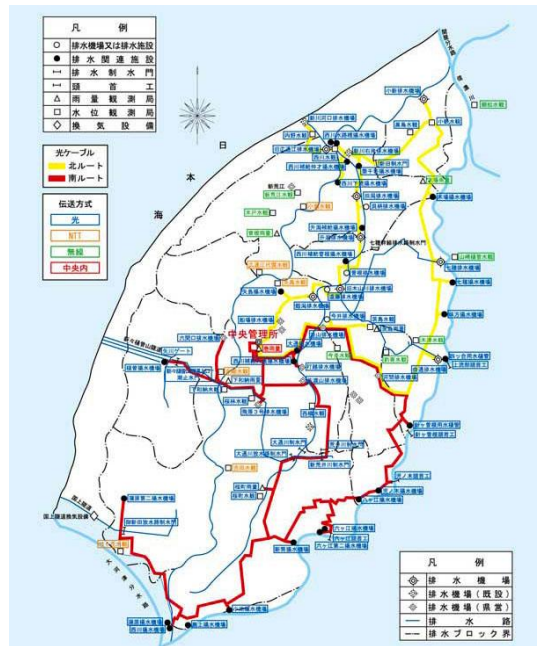
◎ 70 排水機場で暮らしと農業が成り立つ

国営新川二期農業水利事業等の排水改良の結果、西蒲原平野は水稻を中心とした一大農業地帯に変貌した。しかし、排水の多くは新川に集中した機械排水に頼っており、宅地化・市街地

開発等の土地利用の変化に対応できず、計画量以上の降雨があるたびに湛水被害に見舞われた。昭和 53 年 6 月 26 日～28 日に発生した集中豪雨では甚大な水害被害となり「西蒲原排水農業水利事業」(通称：広域排水事業) 発足の契機となった。昭和 55 年度～平成 15 年度に大通川放水路・御新田放水路の造成や七穂排水機場の新設など分散排水による排水能力の増強を行った。

平成 18 年度から国営新川流域農業水利事業が着工され、新川河口排水機場の改修、新川右岸排水機場の更新が行われている。さらに、平成 26 年度から国営新川流域二期農業水利事業が着手され、老朽化している新川河口排水樋門や田潟・旧木山川・鎧潟の排水機場の更新が進められている。

現在西蒲原地域には、約 70 ヶ所の排水機場と大小合わせて 3,000km 以上の排水路が毛細血管の如く張り巡らされている。これら日常の運転・維持・管理が行われてはじめて現在の暮らし・農業が成り立っている。



西蒲原計画排水系統図

出典：西蒲原排水地区水管理システム

◎ 新川河口排水機場の記念碑

- ・治水偉績碑：M21.7.(初)、S55.4(移設)

新川開削及び以降の経緯と功労者の業績を顕彰

明治21年水戸の雨宮広厚氏(元西蒲原郡長)他18名の主唱者が、水利土工組合人民一同からの醸金を以て建立。

篆額 公爵 三条実美



治水偉績碑 撮影：加藤

- ・広通江改修補償事件和解記念碑(広通江治水工事跡)：T12.3.(初)、その後移設

大正6年4月、新広通江が完成したがあまりに排水がよくなり過ぎこれまでの耕地に水不足が起った。その為、損害賠償訴訟となり2年を費やした。大正9年賠償金と揚水機を設置することで和解。それを記念して建立。



広通江治水事業跡碑 撮影：加藤

- ・西川改良新川底樋改造竣工記念碑：T14.3.(初)、S55.4.(移設)

M42.8.~T2.3.木樋から煉瓦積の暗闇(九門)への改造記念

明治42年底樋を煉瓦と御影石とコンクリートの暗闇に改造する「西川改良・新川底樋改造」工事が行われ、大正2年3月五門の底樋が撤去され九門の暗闇が完成した。



西川改良・新川底樋改造碑

この事跡を後世に伝えるため当時の管理者である西蒲原郡長の渡辺喜一が中心となり建立

- ・西川底樋改修記念碑(新川治水事跡)：S5.10.(初)、S55.4.(移設)

明治末期底樋改修反対の内野町との折衝経過と落着を刻む

西蒲原郡内108町村と内野町は悪水の件で争いとなった。当時の代議士大竹貫一と萩野左門及び伊藤淳一郎及び山賀五平の熱心な仲裁によって円満な解決をみた事跡を永遠に記念するため、昭和5年盛大に除幕式を挙げる。



新川治水事跡碑 撮影：加藤

・西川水路橋竣工記念碑：S30. 10. (初)、S55. 4 (移設)

新川暗閘改造の由来と水路橋工事概要

昭和 30 年新川の上に西川の水路橋が完成し新川の水が全て海に流れるようになった事を記念して建立。



西川水路橋竣工記念碑 撮影：加藤

・皇太子継宮明仁親王殿下御野立所石碑：S34. 4(初)、S55. 4. (移設)

昭和 31 年 7 月 17 日、皇太子明仁殿下(現在の天皇陛下)が北陸巡遊の際に新川と西川の立体交差に立ち寄られた事を記念して建立。



皇太子継宮明仁親王殿下御野立所石碑 撮影：加藤

・「水の精」の碑：49. 3. 彫師 新潟市 早川亜美
当時東洋一と言われた新川河口排水機場の完工記念として昭和 49 年に建立。水の精をモチーフとして、逆巻く波を擬人化した巨大な塑像(台座を含めた全体の高さ約 7 m)。台座に 8 枚の銘盤がはめ込まれ、新川掘割前後の様子など西蒲原の変遷が刻してある。



「水の精」の碑



「水の精」台座にはめ込まれた 8 枚の銘盤 撮影：加藤

◎ 新川開発創業者供養塔 (高山 蓮久寺)

S43. 5、西蒲原土地改良区新川区が建立

新川開発創業者伊藤五郎左衛門をはじめ 21 名を供養。「治水は郷土を繁栄させ 治水に当った者は郷土繁栄の人柱となった。」



毎年 7 月 1 日に偉業を成し遂げた先人の供養を偲び、盛大に供養祭が行われている。



高山の蓮久寺での新川開発供養祭 撮影：加藤

第五章 新川開削 200 年祭にむけて

◎ 越後新川まちおこしの会発足

内野に居を構えて21年、平成18年町内会長を引き受けられた当会の故・丸山幸平事務局長（平成23年4月14日死去）が、長年職場の新潟大学へ毎日通いながら、足元の内野のことをあまり知らなかったことに気が付き、家の脇を流れる新川のことについて調べ始めた時、新川と言う「宝の山」があることに目覚めたという。

「三年に一作」と言われた越後平野。とりわけ西蒲原の三潟地方は、三年に一作の収穫があれば良い方であった。その悪水抜きのため、80年の歳月に9回の請願がようやくかない、文化15年に工事が始まった。

天井川の西川の下に底樋を通し、金蔵坂の砂丘を崩して現在の新川をつくり上げた。そして西川の用水に対し新川は、現在も西蒲原地域の排水の根源を担っている。

この歴史こそ、「田園型政令指定都市」の新潟市そのものではないか。長岡の県立博物館、みなとびあ（新潟市歴史博物館）には、西蒲原郡三潟水抜工事の説明や当時の底樋工事の模型があるが、現地の内野には何もない。

内野の現場にあってしかるべきではないか。その想いが周囲を動かし、平成19年2月17日、「越後新川まちおこしの会」が発足した。



西地区コミュニティセンターでの設立総会 撮影：加藤

「発足趣意書」

「昭和30年代までは、サケ・ウナギ・鯉・蜆等がよく獲れ、夏には子どもたちが水泳を楽しむなど、地域の人々に豊かな恵みをもたらす親しまれた川であった。しかし、現在の新川は西蒲原一帯からの雑排水が大量に流れ込み、水質が悪化し、周辺にはゴミが堆積している。川は汚れ、人々も遠ざかって今は“忘れられた川”となっている。

新川は歴史的意義をそなえ、再生すれば豊かな文化をもたらしてくれる可能性を秘めている。この埋もれた地域の宝をよみがえらせるため、徒に先を急ぐものでなく、今こそ、歩みを止めて岸边にたたずみ、川面に思いをよせるべきではないか。」

その想いのたけが「新川暗闇の銘鉾の発見」、「川の立体交差サミット」、「新川普請まるごと博物館」構想や、「新川野外音祭」、「新川水系一斉清掃」、「新川開削劇」に繋がっていった。

入場無料です。どなたでもお出で下さい

よみがえれ! 粟刈堤、食べた、歴史の宝庫新川

設立総会 記念講演会

越後新川まちおこしの会

演題 「新川と国営事業について」
農林水産省 北陸農政局 新川流域農業水利事業所 青木 善治所長

日時：2007年2月17日(土)
時間：午後2時～午後5時 (西内野小学校隣り)
会場：新潟西コミュニティセンター大ホール
新潟市内野上新町11810番地 電話262-0377



連絡・問い合わせ先
越後新川まちおこしの会(仮称)
丸山 幸平 電話025-263-0037

会の設立趣旨
本会は、新潟市内を流れる川と川の立体交差などの近代文化遺産とも
富める。新川の歴史およびその流域で育った産業や文化について種
類を定め、その歴史遺産を次の世代に、さまざまな手段を通じて後世
および現地のまちおこしに寄与することを目的とする。

共催：新潟市西地区公民館、内野の今昔を語る会、海岸松林ボラの会、NPO法人 新潟水辺の会

設立総会のチラシ

◎ 地域住民の自主的なワークショップ

西川水路橋からは、新川と西川の立体交差全体を間近に見ることが出来るなど全国的にも大変珍しにもかかわらず、現地には標識や説明板すら無かった。

越後新川まちおこしの会の丸山事務局長は、次世代にこの宝を残すため、川を管理する新潟県に案内板設置をして提案した。新潟県新潟地域振興局も地域住民の意見を聞いて案内板を設置することになり越後新川まちおこしの会では、その案内板設置の現地検討会と、3回の自主的なワークショップを開き検討をおこなった。



12月24日、寒風の吹く水路橋で検討会 撮影：加藤

これまでの案内板設置は、河川管理を行う行政だけで案を作り、いつの間にか案内板が設置されているケースが多いのだが、今回は、地元・内野の住民と越後新川まちおこしの会が住民の目線で案を練り上げ原案を完成、業者に発注となり案内板設置の除幕式を迎えた。

◎ 新川・西川立体交差、現地案内板除幕式

平成20年4月29日(火)午前10時より新川右岸にて、新潟地域振興局の佐藤正司局長、新潟市西区の岡田一久区長、国営・新川流域農業水利事業所、開削時の願人の子孫などのご出席をいただき、佐藤大作会長ほか会員30数名が参加し現地案内板の除幕式を行った。

今では度々、旅行者の方がその看板を見て、近くにいる私たちへ新川開削について質問してくることも多い。



水路橋を望む新川沿いに設置した案内板 撮影：加藤

案内板は縦1.2m×横0.6mのステンレス製看板2枚に、1枚目は、「新川の姿と立体交差の位置」、「川の役割と変化」、「新川誕生の背景と歴史」の航空写真とイラストを入れてある。

2枚目は、「改修の歴史」、「歴史的な工事を可能にした技術」、「新川・西川クロスクイズ」を入れ、子どもたちにもクイズを楽しみながら理解できる様に工夫を凝らしたものである。



除幕式参加者記念撮影（横尾大橋脇にも新川・西川の立体交差を示す標識が立った） 撮影：加藤

◎ 発見された新川暗閘の銘板『暗』

新川暗閘の思い出を地元の方にお聞きすると、新川暗閘を「堤防」と呼んでいたとの話を数回聞いた。下記の写真を見るまでその意味を図りかねたが、写真を見ると川にドンと根を張り、川からは堤防の如く見えた喩えは、正にその通りであった。



堤防の如くそそり立つ新川暗閘 出典：西蒲原土地改良区所蔵

西川水路橋が完成した際、これまでであった新川暗閘はダイナマイトで爆破されて無くなった。だが、近年その新川暗閘に取り付けられていた御影石の銘板が発見された。



完成直後の新川暗閘写真を拡大
出典：新潟県『西川改良及新川底樋改造工事報文』

この発見のきっかけとなったのは、越後新川まちおこしの会発足前の会合で、同会顧問の樋木酒造社長の樋木尚一郎氏から、「家の庭に新川暗閘の銘板がある」との話からであった。

早速その銘板を見に行ったが、それはまぎれもなく新川暗閘の『暗』の銘板であった。樋木尚一郎氏は、どうして家の庭にあるのか先代から詳しい由来を聞いていなかったと言う。これだけ大きな御影石である、まだ探せばどこかにその他の文字がある筈と探し始めた。



見つかった新川暗閘銘板『暗』
内野町 樋木酒造宅のお庭 撮影：加藤

◎ 次に発見された『新』『川』の銘板

その結果、水路橋建設当時中野小屋村村長であった椎谷氏宅の庭先に『新』、『川』、『桜組』の銘板は見つかった。

これは下部写真で分かるように西川の側壁外側に付けられていたものである。御影石の大きさは『新』、『川』、いずれも（縦 1.35m、横 1.35m、奥行き 0.3m、重さ 1 トン）の物であった。残りの 1 枚は、新川暗閘を作った際の施行業者「桜組」の物であった。



見つかった暗閘銘板『新』、『川』と旅行社桜組
中野小屋 椎谷一昭宅 撮影：加藤

◎ 新川下流側の銘板

これまでの銘板は、いずれも上流側の側壁にはめ込まれたものの発見であるが、下流側の銘板はこれまで見つかっていなかった。

2年前の西蒲原土地改良区の資料調査の過程で、新川暗閘の建設工事中の写真を発見したが写真は暗く写りその文字まで見ることは出来なかった。だがパソコン上で画像処理すると、そこには大きな発見があった。写真には新川暗閘の煉瓦作りのための工場の煙突2本が写り、工事中の九門の暗閘には、海水の流入を防ぐための逆流防止扉の概要がくっきりと読めるものであった上、閘門上に2人の男性が話をしている姿さえ読み取れ、この暗閘の大きさを実感するものであった。



新川暗閘下流側の銘板写真 出展：西蒲原土地改良区所蔵

その写真を拡大してみると「流濕毓秀」の四文字が読めた。この毓秀について調べた結果、意外な意味が含まれている事が判明した。



「流濕毓秀」と読めた 出展：西蒲原土地改良区所蔵

◎ 「流濕毓秀」

この意味を計りかねて知人が県立図書館を訪ねて「流濕毓秀」について聞いてくれた。結果、新川暗閘建設の責任者が、治水に精通した清國の河川工事の名人の毓秀※に肖る意も含めて付けたのであろうとの事であった。

読みは「ながれ うるおいて、はぐくみ ひいず」、意味は「この流れによって、当地域が湿潤となり、生産が高まる」との事で、西蒲原の湿地帯が、実り豊かな大地に生まれ変わる事を祈っていた。現在の西蒲原郡の美田を予想したものであった。

◎ その他の発見

散逸した新川暗閘の銘板を捜しての記事が新聞で報道された処、下流側の「流濕毓秀」の銘板は出てこなかったが暗閘のプレート2枚が、水路橋より50mしか離れていない住宅にあることが判明した。



「第七號」と「第九號」の暗閘のプレート 撮影：加藤

銘板と同じく御影石で大きさは、縦30cm×横90cm×奥行き30cmのものであった。所有者の杉田さん宅のお祖父さんが、西蒲原土地改良区にお勤めで、新川の掃除船に乗っていたとの事で暗閘撤去の際、こちらへ来たのであろうとの事であった。

今後「流濕毓秀」の銘板等情報をお持ちの方のご連絡をお待ちしています。

※ 白鍾山 (はくしょうざん)

清、漢軍鑲旗人。字は毓秀。號は玉峯。諡は莊恪。雍正・乾隆の間、河東河道総督となり、兩河の間に歴任すること四十餘年、河道の情形、工程の利弊に精通す。著に豫東宣防録・南河宣防録がある。

◆ 新潟市「水と土の芸術祭」

◎ 「第1回全国川の立体交差サミット会議」

平成21年新潟市は「水と土の芸術祭」の実施にあたり市民への参加募集があり、当会が水と土にかかわる表題のサミットを全国の川の立体交差をしている地域に呼びかけて国内初めてのサミットを新潟でおこなったのである。

ここ西区内野には、幕末に高度な技術と18名の願人の苦難のもとで造られた新川と西川の立体交差がある。この川の立体交差は、西蒲原を現在のような美田にした近世農業土木遺産であると共に、市民が誇れる新潟市民文化遺産として認定を受けている。全国に100を超える川の立体交差が存在するが、その交差する全景を眺めることができるのは、新潟の交差が最も分かり易い。

この歴史的な新潟市民文化遺産は、もっと広く新潟市民、県民に知ってもらおうと共に、水と土の芸術祭に合わせ、全国の川の立体交差があるところの自治体、農業団体、観光協会、そこで活動している市民団体、歴史団体、などに呼びかけ、新潟市西区で第1回の「全国川の立体交差サミット会議」を開催したのである。

その目的は、川が立体交差している地域には常に水と土が関係しており、「水と土をめぐる地域交流・まちおこし」の実践発表を行い、水と土の環境文化を全国に発信することにより必ずや地域に資するものとなる。



新川の歴史について講演の会場の様子 撮影：加藤

サミット会議は平成21年8月1日内野地区公民館にて開催された。午前中は新潟市歴史文化課歴史資料整備室長藤塚明氏から新川の歴史について講演、その後基調鼎談、日本大学工学部教授伊東孝氏、新潟市長篠田昭氏、新潟大学名誉教授大熊孝氏（当会顧問：サミット会議実行委員長）による海外の川の立体交差事例紹介、日本の近代土木遺産における新川・西川立体交差の意義など、また「水と土の芸術祭」の意義、新川・西川立体交差への思いなどが大熊顧問の司会で進められた。



伊東孝氏・篠田昭氏・大熊孝氏による鼎談 撮影：加藤

午後からはパネルディスカッションがおこなわれた。熊本県から水の渡る橋・通潤橋、滋賀県から田川と高時川の立体交差・田川カルバート、埼玉県から見沼代用水の立体交差群、愛知県から名古屋城外堀への水・矢田川伏越、新潟県から新川と西川の立体交差について、建設の経緯紹介があり、各地域での評価や技術的な特徴、保存維持の課題などが語られ、会場からの活発な質疑応答がなされ、川の立体交差サミット会議を終了したのである。

新川に近い内野公民館会場で全国からの人を招いて第1回立体交差サミット会議が、第1回「水と土の芸術祭」に開催されたことに大きな意義がある。また珍しい川の立体交差の周知と今後につなぐ課題が残されている。



各地区から参加のパネルディスカッション 撮影：加藤

にいがた 水と土の芸術祭 2009

◎ 「新川普請 まるごと博物館」開催

平成 21 年「新川普請まるごと博物館」は、新潟市「水と土の芸術祭」に応募、川の立体交差近くの新川左岸の土地を地主さんよりお借りし、「第 1 回川の立体交差サミット会議」にあわせ平成 21 年 7 月 18 日～10 月 12 日まで毎日会員が交代で常駐し来館者をガイド、盛況を博した。高橋利男館長、来館者数約 3,000 名。



新川普請まるごと博物館 撮影：加藤

① 慶応の底樋 1 門の部分制作

(140 年前の底樋：幅 5.4m×高さ 3.6m)

② 新川暗闇の水門 1 門の部分制作

(80 年前の暗闇：幅 10.0m×高さ 4.8m)

③新川暗闇銘板(御影石) 4 枚の移設展示

(80 年前の銘板：幅 1.2m×高さ 1.2m)

④新川や川の立体交差の写真やパネルの展示

西川水路橋を目の前に見える新川左岸の地に、江戸時代の木製の底樋模型、そして大正時代のレンガ造りの暗闇 1 門の実物大模型を製作、現代の鉄製トラス橋 3 代の大きさを実感して頂くと共に、新川開削の歴史と、近世土木農業遺産の記憶を後世に伝える作品を展示した。



江戸時代の木製の底樋と新川暗闇 撮影：加藤

◎ 「新川まるごと博物館」開催

平成 24 年「水と土の芸術祭市民プロジェクト」に参加、新川左岸の榎尾大橋詰めに 7 月 14 日オープンし 10 月 13 日まで開催した。

佐藤正人館長、来館者数約 1,200 名



新川まるごと博物館への見学者 撮影：古俣

第一会場の展示室には、かつての新川や内野の風景写真、田舟、田下駄、排水用踏み車、大型ソリ、櫓、大型ビクの他、西蒲原の「地形ジオラマ」、「明治・現代の透かしジオラマ」、「新川暗闇模型」などを展示した。



博物館へ見学の新川暗闇市長 撮影：古俣

前回使用の新川暗闇、底樋を第二会場とした。博物館脇に設置した昔の踏み車の体験は、子ども達に大人気であった。



子供達に人気のあった踏み車の体験 撮影：古俣

◎ 新川の生き証人的存在の新川右岸排水機場

西川水路橋上流、約 400mに新川右岸排水機場がある。この機場は、戦後の物資不足の昭和 28 年に国営灌漑排水事業「新川地区」により建設されたものであるが、建物側面の窓枠は、切妻屋根で風格・品位を持ち、建設当時の機器類は丹念に保守され機能を果たし続け、新川の生き証人的存在であった。



昭和 28 年から稼働の新川右岸排水機場外観 撮影：加藤

当機場は、新川沿線の海拔 0m 以下の水田、畑、農地周辺に広がる宅地等の浸水被害防止に大きな役割を果たしてきた。それが 60 年の歳月を経て、施設や機器類が老朽化して更新の時期を迎えたため、平成 18 年度から始まった※国営新川流域農業水利事業により、この新川右岸排水機場は少し離れた場所に平成 21 年から新機場の建設が始まった。

そして完成後は建物を撤去し、機場に流れ込むゴミの乾燥場や駐車場にする計画がある事を知った。



新川右岸排水機場内部の 5 基のポンプ 撮影：山岸

※ 国営新川流域農業水利事業

平成 18 年度から 26 年度までに、新川河口排水機場と新川右岸排水機場を、事業費 330 億円の予算で順次ポンプ設備等の改修を行う

◎ 右岸排水機場の保存と公園提案

当機場の存続とその周辺の公園化は、当会の故・丸山幸平前事務局長の悲願の事業である。

当時、農水省新川事業所などへ話し合いにゆくと、丸山氏は決まって「あなたがたが新川で実施している 330 億円の事業費の 1% でよから地域への還元をしても良いではないか」と食い下がっていた。

丸山氏はその予算で公園ができないことを承知しての上での役人とのやり取りである。丸山氏が亡くなった後は、我々会員がその遺志をついで、何としても実現せねばならない。

旧施設の建物は趣があり美しい景観を保っていた。また内部のポンプ施設を含めて産業文化財の価値が十分にあるとして、その保存運動を当会が中心となって起こしたのである。

しかし、保存した施設を維持する費用が莫大になることが判明し断念することになった。それでは 5 基あるポンプの内 1 基だけでも残せないか、ということになった。

この旧排水機場は、地域の宝でもあり何とか施設の一部を残し、次の世代に伝えてゆかねばならない。



平成 24 年 7 月稼働の新川右岸排水機場 撮影：佐藤

については、新排水機場の工事作業ヤードに使用している場所が、次の更新時期（約50年後）まで公園として使用できるようになった。

ここにポンプ1基とシャフトを展示し、解体施設の廃材を利用してテーブル、椅子などの設置を計画した。そして、農水省新川事業所へ当会と地域の自治会長などとの連名で陳情をおこなった。

後日、新川事業所からは費用もかかり難しいとの回答であったが、丸山氏の意思を叶えるため、新潟市地域活動補助金を利用して手作りの公園を目指していることや、役人が地方勤務した時のあり方などを議論した。

それ以降、新潟市の西区役所とも連携して新川事業所との折衝はスムーズになり、当会の計画にそって進められた。

◎ 右岸排水機場公園の建設

「みづつち文化創造」の補助金50万円事業があるので応募したらとの話があり、早速、応募したところ45万円の決定額が出た。

それからが、また忙しい。ポンプ設置台座の設計は初めシングル鉄筋で提示したところ、鉄筋量が不足ではないかとのこと、鉄筋径を落としてダブルにしたが、費用が増大した。

次に測量して配置位置、高さ等を出して、基礎造成、鉄筋組立、型枠、コンクリート打設、養生と多忙をきわめた。会員が力を合わせた結果、出来栄は上々であった。



ポンプ台座のコンクリート打設 撮影：山岸



ポンプ1基とシャフトを据え付け 撮影：山岸

◎ 五郎左衛門公園の命名と開園式

公園の名称は、一般募集をおこなって決めることになり21点の応募があり、その結果「五郎左衛門公園」が選定された。

理由は新川開削の中心になって、資金や幕府へ働きかけに努めた人物で、新川開削の代表者の恩恵を後世に伝えるためである。

公園建設は費用が増大したため、展示台座の周囲柵や旧機場の廃材を利用したテーブル、椅子などが残工事として残っており、平成26年度の「市民プロジェクト事業」にて完成する予定である。テーブルはポンプ周りの鉄板を、椅子は建物基礎のコンクリート片を転用加工して活用する予定である。

平成26年10月に地域の方々や関係者を招いて「五郎左衛門公園」の開園式をおこなう予定である。

そしてこの公園が、地域の方々に愛し続けられるように、当会ははじめ地域の方々と一緒になって守り続けてゆく。



公園整備のため、草刈中 撮影：山岸

◎新川をきれいに…地域住民による川清掃

越後新川まちおこしの会設立から、毎年、春と秋に新川流域のゴミ拾いを行い、環境美化に努めている。参加者は、地元中学生、日本こども福祉専門学校生、新潟大学生やボランティアグループ、西蒲原土地改良区、高山老人会、沿川地域の市民、近隣企業の方々など100人超。西川水路橋に集合し、新川上流班、下流班、船上班の3つに分かれてゴミ拾いを行っている。

ゴミ袋を手に、置き去りになったペットボトルや空き缶を拾い上げる。いっぱいになったゴミ袋を西区役所のクルマが回収。集められたゴミは700kgに及ぶこともある。



ゴミを背景に参加者全員の記念撮影 撮影：加藤

川のゴミが減らない理由としては、①昔から、川はゴミ捨て場であるという意識を持ち、未だに思っている人が多い。②堤内外地の畑などで使用した廃材が風で飛ばされ、水面に落ちてゴミとなるケースも多い、などが考えられる。

対策としては、河川の沿川の人々への啓蒙が大事である。具体的には、①ゴミを見せて意識を変える。②河川ゴミ回収へ参加してもらうことである。関心の無い人に対してどのように参加を促すか、今後検討が必要である。

当会の特徴として、清掃参加の地元企業の方には「清掃ボランティア証明書」、参加者には「清掃ボランティア感謝状」を発行している。

◎年ごとに盛況・多彩に…「新川野外音楽祭」

静田神社の境内で、5月第3日曜日に行われている「新川野外音楽祭」。プログラムの内容も、年を追うごとに盛況・多彩になっている。

平成26年5月18日の音楽祭の出演者は、内野中学校吹奏楽部、ハーモニカグループ「オータムブロー」、新潟大学アコースティック音楽サークル「クレッシェンド」、新舞踊「内野ひしの実会」、漫才「のりチャン&エミコ」、カラオケ(4グループ)、踊り「よさこいソーラン」(日本こども福祉専門学校生)、西内野コミ協吹奏楽団、内野盆踊り「内野盆踊りを楽しむ会」と100名を越えた。観客(150名)と一緒に音楽を楽しむのがこのイベントの特徴である。

内野中学校のブラスバンドは、「鉄腕アトム」「星条旗よ永遠なれ」など力強い演奏で5月のさわやかな空気を切り裂いた。新潟大学「クレッシェンド」は、珍しい楽器でアイリッシュ音楽を演奏。日本こども福祉専門学校生による「よさこいソーラン」ではダイナミックな踊りと長くスマートな脚に見とれた人も多かった。

カラオケの方々は、それぞれの「おはこ」を思い入れたっぷりに歌い上げ、内野コミ協吹奏楽団は「士官候補生」「ボギー大佐」など伝統のマーチを迫力満点に演奏。最後の「内野盆踊り」では、観客も参加してにぎやかに3ヶ月早い盆踊りに酔いしれた。新川野外音楽祭は、初夏を告げるイベントとして定着しつつある。



新川からの川風を受けながら演奏する方々 撮影：山岸

◎五郎左衛門しのび、新川開削劇を上演

新川の歴史をもっと多くの人に知ってもらいたい。伊藤五郎左衛門ら先人たちが新川開削にかけた情熱、執念を何とか芝居にして見えるものにできないか……。そんな思いから、すでに小瀬小学校の教員や日本子ども福祉専門学校生がトライしていた台本を参考にして、30分ほどの芝居に仕立て上げたのが、芝居「掘った、通した！新川開削物語」である。

役者は、越後新川まちおこしの会のメンバーと日本子ども福祉専門学校の生徒。十返舎一九が語り手となってストーリーを進め、セリフはすべて「内野弁」。初演は平成25年10月17日、西区公民館のホール。観客は100名と盛況だった。練習不足でセリフを忘れてしまっても、扇子やハンカチで隠した手元のメモを見て乗り切ったり、そんな様子を見守る観客も自分のことのようにハラハラドキドキしたり。舞台と観客が一体となったステージだった。

平成26年7月1日には、蓮久寺で毎年行われている「新川開発創業者慰霊報恩施餓鬼供養」の祭にも上演。多くの方々から拍手を浴びた。



語り手の名調子で劇は始まった 撮影：加藤

新川開削劇の上演を期に「五郎左衛門ありがとう」という歌もできあがった。蒲原平野を舞台に、季節の移ろいを背景に五郎左衛門をしのぶ、小学生でも歌えるような構成になっている。この芝居が地域や小学校、中学校などで上演され、「五郎左衛門ありがとう」も歌われ、新川開削にまつわる物語が広がることを願う。



観客の皆さんより惜しめない拍手が出演者に 撮影：山岸

五郎左衛門 ありがとう

詞・曲 古俣慎吾

角田山から 吹く風は
ほんわか 春のおいだよ
桜のつぼみも ふくらんで
もうすぐ田植えが はじまるよ
五郎左衛門 五郎左衛門
あなたは どこへ行ったのか

キラキラ太陽 輝いて
入道雲が 立ち上がる
田んぼは緑の じゅうたん
セミがうたって 夏花火
五郎左衛門 五郎左衛門
あなたは どこにいるのやら

青空高く すみきって
くる〜り絵をかく 赤トンボ
祭りばやしは はなやいで
ずっしり稲穂が 垂れ下がる
五郎左衛門 五郎左衛門
あなたは 達者でいるのかな

蒲原平野に 雪が来て
田んぼも すっぽり埋まったよ
あったか コタツでぬくまって
みんなで 春を待ってるよ
五郎左衛門 五郎左衛門
あなたも 一緒にぬくまろて

五郎左衛門 五郎左衛門
新川は いまも流れてる
あなたは いまも生きている

五郎左衛門 五郎左衛門
ありがとう

◎ 新川の出来る前からあった洗堀

内野の町の裏を、ひっそりと流れる洗堀という排水路がある。江戸時代の三鴻悪水抜き絵図には、ちの潟より早潟を經由して内野の下で西川に合流する広通江が描かれている。

1820年新川開削工事で広通江を断ち切り新川が完成し、広通江の下流部が洗堀となり戦後まで西川から水を汲み上げて耕作していた。



内野町の裏を流れる洗堀

だが昭和50年頃からの都市化に伴い水田も姿を消し、西川からの取水もなくなった。雨水と家庭排水だけの堀となったが、内野町の雨水対策上重要かつ必要な堀である。現在は新川合流部に水門を開け、新川の水を自然流入させ、その後水門を閉じて、一日2回ポンプアップし新川に排水し洗堀の浄化を図っていた。

しかし、新川からの自然流入の水は、上流部まで達せず、泥がたまり、夏は悪臭の発生源となっていた上、下水道普及率も8割弱であった。市でも数年に一度、泥さらいをしているが、すぐに泥が溜まってしまう状況であった。



洗堀のゴミ取りを行う藤巻さん 撮影：加藤

◎ 洗堀の再生

数年前内野一番町自治会長をしていた世話人の藤巻英弥さん(平成26年1月10日死去)が、魚の住める堀にしたいと、平成20年6月から活動を開始した。

①水質検査、②河床勾配測量、③市・住民と検討会、④市に浚渫の申請、⑤西川からの取水、⑥生物調査、⑦ゴミ止め柵設置を行った。

西川から月1回だけの流水でも効果が大である。先端部分のヘドロが新川に流れて行き、大変きれいになった。

平成22年8月に新川から10cm位の小魚(ボラの子と思われる)が数10匹づつ集団になって上がってくるのが何日も見られた。



西川からの水を洗堀に注水 撮影：加藤

平成25年5月から12月迄EM(有用微生物群)発酵液とEM団子を洗堀に撒いたところ、散布前の8月の透視度8cmが実験完了の平成26年1月では、100cmと驚異的に透視度が上がった(上流域)。今後も関心を持って浄化作業を継続してゆくことが大切である。



洗堀にEM菌をまく濱倉さん 撮影：古俣

◎ 新川開削 200 年祭にむけて

文政 3 (1820) 年 1 月先人達の苦勞の末、新川は開通した。これで 3 年に 1 作から逃れられ毎年米の収穫ができ「借金が返せる」、「娘を売らなくてすむ」と農民達の喜び様は、現代の私達には創造を絶するものであった。

その喜びの新川開削からまもなく 200 年が経とうとしている。その 2020 年まであと 5 年と数ヶ月、開削が始まった 1818 年から換算すれば 3 年と数ヶ月となる。

今後私達は何をすればいいのか？今日もニュースで全国各地で豪雨による災害が報じられている。まずこの辺では停電で排水機場のポンプが止まらない限りは稲が水に浸かったり、家屋への浸水の心配は、ほぼいらない。これも新川があるからである。

だからこの地域に住んでいる人達に『新川』を知ってもらい、これからも百年、二百年と語り継いでいかなければならない。

そのためには当会のみならず、地域住民から農業関係団体や学校教育機関また河川を管理する新潟県、新潟市、西区、更に国の行政機関の方々からもご指導とご協力をいただきながら、新川開削 200 年祭を押し進めていく。

新川開削 200 年祭実施事項

- 1、新川開削 200 年祭準備会の設立
 - 2、新川開削 200 年祭実行委員会の設立
 - 3、新川開削 200 年記念慰霊祭の実施
 - 4、新川開削 200 年記念イベントの実施
- 他

◎ 新川の開削と記憶の伝承

金蔵坂を掘割り、新川を開削し、底樋が埋め込まれて 194 年の年月が経過した。最新のコンピュータシステムで西蒲原の給排水を管理している。しかし、一見のどかで豊かな蒲原平野であるが、海拔 1m 以下が 30% を占めるため、人為的に操作する排水治水対策に頼る体質は今後も変わることはない。

もしもこれらの施設が機能を果たすことが出来なくなった時は、かつてあった西蒲原の茫々たる三瀉の湿地帯風景になることを、住民は頭の隅に置かなければならない。



中央管理所でコンピューター管理されている新川 撮影：加藤

『乱世に洪水なく、治世に洪水があるのはなぜか』の問いに対して、江戸末期の地質学者の小泉蒼軒は、『平和に浴して廃れた地を開発するから、川筋を狭め水害が起きる。乱世はそれを行わないから水害が起きない。しかし、開発することが悪いことではない。理にかなった開発は、ぜひやらねばならない』と言った。

人間が生きてゆくための環境は、決して機能や経済効率だけで成り立つものではなく、「記憶」が人間の糧となり、未来に伝承されていくものと確信している。

新川沿いの「はざ木」背景に、弥彦山と角田山の昔変わらぬ風景



『全国有数の米生産高を誇る西蒲原郡の美田が、現在の姿になったのはそれほど古いことではない。西蒲原のほとんどの悪水を集めて日本海に放流している新川、その新川が江戸時代の末に掘割されたお蔭である。』

治水偉績碑

治水偉績碑
 藩原一郡東南長山西北原野信濃巨流郡人海有一支流曰西川自地蔵堂曰美川自八井寺二流相距三四里中間村落南至筑前北至小新村二百餘村地勢卑溷田渴大渴三沼地低川底四流會集沮洳淤塞每雪漸雨霖澍淫澍蓄無所發池田鬱廢壞壘年築邑民佃此地墾墾予亦難矣天明中邑人坂井庄左衛門與田山園右衛門五木恒右衛門田壽鑿金藏坂通溝注海上讀藩府各村其所轄爭發異議人坂之覺政之初曰河俣國有警誓書狀強請衆意在必成群集金藏坂鑿山鑿溝議政曰此溝一開則信濃川水道一變却之後屢請不允文化年間中川堤壞各村漂沒人民流込戸口漸減此間與長岡蒲原三十有七村屬村上藩者十有五村伊藤五郎左衛門中野清左衛門中野吉郎左衛門神田興隆兵衛和田喜鎧治古侯與兵衛伊藤五右衛門土屋仁兵衛椎谷多右衛門小西半左衛門岡式右衛門南波長左衛門吉田為右衛門福田今右衛門若杉九郎左衛門伊藤又次右衛門與神保半由長沼半左衛門被野佑左衛門山際七兵衛坂井左衛門議各陳請其藩曰測地勢高低設閘門則水害信濃川水勢二藩固患水害嘉納其言協議狀請藩府始得允文化十五年二月興工男女排難爭採土春先室金藏坂開溝三尺溝一長一里四町連源三沼連海西川北流常中間川底設暗閘二門以通溝流其法構村造方曾縱三尺溝一丈八尺長廿五丈文政三年竣工於是溝水奔流注海每歲澆溢不復患水害初興工事各村意見不一故五十二村屬二藩浩專辦工事及工成上流村落坐免水患公私取獲咸加幾倍皆稱神功而誌其謀此舉百方風旋蕩盡家淫無少難色二藩賜諸姓田地米菑其功文政九年興工廣溝幅為十五間多暗閘為三門溝渠四通沮洳湖澤壘為田畝新多村落十有七而西赤塚鄉亦免水害文政十年華府收三沼及十七村為直轄命南原平吾坂井平之助中林社平苗木藤左衛門藤田嶋之助樋口為八間壘三沼為水田天保四年興工廣溝幅為廿五間多暗閘為五門浸三沼中流凡二里早通川是也間五年竣工凡興役三次初役丁百九十九萬五千五百人二次百萬五千五百人經費出於二藩及邑人三次二百萬三千人經費以新墾田收獲年次備却於是黨苦卑溷者皆安其地土性一變或石豐饒男耕女桑偷衣甘食不復知昔日凌溢為何物而二藩命坂井庄左衛門伊藤五兵衛大屋治左衛門古侯與兵衛等開工事又慶應年間果歲淫雨堤壞不治泥濘四溢皆湊閘門水勢衝突溝渠填注水道閉塞歷年建築蕩然成墟乃眾束手東渡交通二藩命五十二村里正數力驚尾理吏萩野左衛門山際郡司等督工修繕三姓開壘三沼若慶應二年興工暗閘長廿五丈較為廿一丈六尺縱三尺改為六尺更設門扇防海潮逆入建築仍旧堅牢倍前期年竣工及明治維新布帛一之制經屬屬藩志謀之九十一村民戶告郡定期則舉一員若三員掌工事 聖覽之北巡駐 普濟上觀覽工築之流殿上奏興工節末二藩及諸姓効力工事 狀聞名姓兩宮部長長與諸姓相誦曰此工一成水害永除上流村落萬頃咸與豐饒沐浴聖代之遐澤志皆二藩不吝宏論諸姓効力工事百折不撓期安遂於年月之後之所致宜建碑勒石永垂之不朽請未撰文且曰文曲盡其籌策燭莫失簡未詳之不得乃往觀其地撰狀檄檄其機擬使後人有所感焉
 明治廿一年戊子七月穀日建石
 仙台 岡 千奴 撰并書

新川河口排水機場にある「治水偉績碑」

新川九門暗閘銘鈔

秀 毓 濕 流

『流濕毓秀』 ※解説は P30
 (ながれ うるおいて、はぐくみ ひいず)

冊子「越後 新川開削ものがたり」
 ～川の下を流れる川がある～
 協力：農林水産省 新川流域農業水利事業所
 発行：平成 26 年 9 月 30 日
 企画：越後新川まちおこしの会
 編集：越後新川まちおこしの会 編集委員会
 文責：加藤 功
 問合せ：090-4701-3910 (加藤)